

塚 鞍 天 穴 掛 神 遺 遺 遺 跡 跡 跡

—緊急発掘調査報告書—

1984

東部町教育委員会
東信土地改良事務所



塚 鞍 天 穴 掛 神 遺 遺 遺 跡 跡 跡

—緊急発掘調査報告書—

1984

東部町教育委員会
東信土地改良事務所

序にかえて

滋野地区の圃場整備事業に伴い、塚穴・天神・鞍掛の三遺跡と、東部高校が開校六十周年記念事業として、校庭の拡張に伴う舞台遺跡の緊急発掘調査をすることになり、町教育委員会はこの発掘調査を「遺跡発掘調査団」に委託し、団長五十嵐幹雄氏（第二次団長教育長）・調査主任塩入秀敏氏を中心にして、発掘調査を完了することができた。

このたび、この遺跡の発掘調査結果を塚穴・天神・鞍掛遺跡と、舞台遺跡の二分冊の報告書にまとめ刊行することにした。

この報告書によれば、塚穴遺跡は複合扇状地の扇端部、古くは千曲川の河岸段丘であったと思われる位置に立地し、近くに塚穴古墳がある。竪穴式住居跡をはじめ土壙（中世）等の遺構、また縄文土器（前・中期）打製・磨製石斧・石鎌・土師器・須恵器等の遺物が多量に出土した。

天神遺跡は、西沢川と大石沢川が形成した扇状地の縫合線付近に立地し、この遺跡からは、縄文・弥生の土器をはじめ中・近世の陶器・磁器等の遺物が出土した。

鞍掛遺跡は、所沢川の形成した南面する扇状地の扇央と思われる部分で小台地の縁辺にあたり、ここからは、遺構・遺物は比較的少量であったが、縄文前中期の土器をはじめ弥生後期の遺物が出土した。

これらの遺構・遺物は、ともに鳥帽子山麓のれい明期解明の貴重な資料としても役立ち、一帯の開発の歴史究明のための手がかりにもなると思う。

このようにして遺跡の発掘は、充分にその目的がはたされ、所期の成果をあげることができた。

発掘調査にご尽力いただいた団長五十嵐幹雄氏・調査主任塩入秀敏氏をはじめ調査員堀田雄二氏・宮原洋子氏・西沢浩氏ほか調査団の方々に、またいろいろご便宜をいただいた土地所有者のみなさんや、地元関係者の方々に厚くお礼申しあげます。

昭和59年3月1日

東部町教育委員会教育長 小林 清美

例　　言

1. 本書は、昭和58年に行なわれた長野県小県郡東部町所在の塚穴遺跡・鞍掛遺跡・天神遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 三遺跡の発掘調査によって、コンテナ40箱分にのぼる膨大な量の出土遺物があつたため、それらについて十分な検討を加えることができなかった。本書では、資料の紹介に重点を置き、記述は最少限に止めることとした。
3. 整理作業は、塩入秀敏の指導により西沢浩・堀田雄二・宮原洋子・尾見智志・塩崎幸夫・齊藤信子・渡辺待子・高藤ふじ江・上屋八百枝・上田東高校日本史研究班があつた。
4. 本書の編集は塩入秀敏と堀田雄二が行ない、遺構および遺物の実測・整図は塩入秀敏・西沢 浩・堀田雄二・宮原洋子・西嶋 力・保坂富男・尾見智志・塩崎幸夫が分担して行なった。また執筆者はそれぞれ文末に記したとおりである。
5. 図中の北は磁北を示し、レベルは各遺跡ごとにおけるベンチマークとの比高（単位：cm）を記した。三遺跡のベンチマークの海拔高度は次のとおりである。
塚穴遺跡……600.9m・鞍掛遺跡……658.3m・天神遺跡……599.1m
6. 今年度実施された三遺跡の発掘調査における遺物・実測図および写真は、東部町教育委員会が全て保管している。
7. 石器類の石質・地層（塚穴遺跡）については、赤塙一巳氏に鑑定していただいた。
8. 本書が上梓されるまでには、数多くの人々・諸機関から御協力を賜った。記して深く感謝の意を表したい（敬称略）。
森嶋 稔・川上 元・児玉卓文・森山公一・長野県東信土地改良事務所・地元圃場整備委員・長野県小県東部高校・東部町産業課
また、発掘調査に熱心に参加された作業員の皆様・調査のスムーズな進行に御協力をいただいた東部町教育委員会に感謝申し上げたい。

目 次

序にかえて	
例 言	
第Ⅰ章 環境	
第1節 自然的環境.....	1
第2節 歴史的環境.....	2
第Ⅱ章 調査の経過	
第1節 発掘調査に至る経過.....	5
第2節 発掘調査団の構成.....	5
第Ⅲ章 塚穴遺跡の調査	
第1節 発掘調査の経過.....	9
第2節 調査結果.....	10
第Ⅳ章 鞍掛遺跡	
第1節 発掘調査の経過.....	53
第2節 調査結果.....	54
第Ⅴ章 天神遺跡	
第1節 発掘調査の経過.....	67
第2節 調査結果.....	68
おわりに	

第Ⅰ章 環 境

第1節 自然的環境

長野県の東部に位置する小県郡東部町は、北方に連なる高峰山(2092m)・東篠ノ登山(2227m)・西篠ノ登山(2212m)・三方ヶ峰(2040m)・湯の丸山(2105m)・烏帽子岳(2065m)などの東信火山群に属する山々の稜線を以て群馬県吾妻郡嬬恋村・小県郡真田町に、また西流する千曲川を南の境として北佐久郡北御牧村・小県郡丸子町に接し、東の小諸市・西の上田市によって挟まれた略菱形を呈する面積約90km²の町である。

北に高く南に低い南面傾斜の地形は、上記東信火山群の雄大な裾野地形の一部であり、それは大きく三つに分けることが出来る。一つは山体部であり、二つはその山体部を深く刻み浸食して流下する河川の形成した押出扇状地であり、三つは千曲川がつくった河岸段丘台地及び沖積氾濫原である。田中橋付近の千曲川河床が海拔500m弱、上田市染谷台地から連続する第一段丘が町役場で533m、山麓線は祢津東町・西町で700mであり、町の東端と西端とではそれぞれに50~100mの差があり、また第一段丘を認められない部分があるものの、概ねこの傾向で三つの地形が連続する。

山体を浸食して放射状に流れ下る河川は、東から深沢川・大石沢川・西沢川・所沢川・求女沢川・三分川・金原川・成沢川・笠石川などがあり、全て千曲川に注ぐ。このうち、深沢川は下流地域が、大石沢川は中流地域が小諸市に属する。深沢川の形成する大規模な押出扇状地は殆んどが小諸市に入る別として、所沢川と金原川・成沢川のつくる扇状地も大規模なもので、東部町の可耕地の殆んど大部分がこの二つの扇状地の上にあると言ってよい程である。特に、烏帽子岳・三方ヶ峰の裾合いを流下する所沢川の土砂運搬量は大きく、東部町最大の扇状地をつくり、扇端は田中から大石に及び、所どころで第一段丘を覆い尽している。この川はしばしば氾濫して被害の記録を多く残しているが、中でも寛保2(1742)年の大洪水(いわゆる「寛保成の渓水」)は、いくつもの集落を壊滅させる大惨害となった。また、金原川・成沢川は双子川で、共に田沢の奥深くから扇状地を形成して大きな合成扇状地をつくって、下方では第一段丘を破壊している。この両河川も寛保2年の大洪水で大被害を与えた。

この大規模な押出扇状地は、下部は巨大な礫をもつ砂礫層で、地表部は火山灰・火山砂からなり、有機物を含んで黒灰色を呈する。これは、俗に「黒ボク」と呼ばれ、軽く且つ粗いため保水力が弱い。その上河川が短小で水量も少ないので、水田面積は広くない。水田の2倍の面積を有する広い畑地帯は全国一のクルミの栽培地帯である。しかし最近は、巨峰・りんごの栽培面積が急増している。

集落は、山麓線沿いに東から原口・新張・出場・祢津・釜村田・東上田・大川・栗林と連なり、典型的な山麓線集落の形をなし、これを祢津街道が結んでいる。また千曲川に沿って河岸段丘上あるいは氾濫原を旧北国街道が走り、その宿場集落や街村集落として赤岩新田・片羽・牧家・加沢・常田・田中・本海野・西海野が連続している。そして、この二者の中間である扇谷・扇端部に、東の中屋敷・別府・金子・大石から西の曾根・東深井・西深井に至るまで多くの集落が立地している。上記の外に、奈良原・姫子沢・東入・西入の谷頭集落・横堀・出沢の谷平野集落がある。

上記の如く、最高所の東篠ノ登山（2227m）から最低所の西海野千曲川河床（485m）まで、約1740mの比高差をもち、火山から大河川まで有する東部町の地形は、全体的には雄大な火山裾野地形をなす。しかし、微細にみると多くの変化に豊んだ地形によってなり、遺跡もこれら小地形の制約を少なからず受けて立地していることは言うまでもない。

第2節 歴史的環境

東部町で出土している原始・古代の遺物の内最古のものは、縄文時代草創期まで遡ることが出来る。東部町最大の所沢川扇状地の扇頂に当る奈良原付近の山腹台地や、僅かに下った横堀・滝ノ沢から有舌尖頭器の出土が伝えられており、現物を実見していないので詳細は不明だが、10000年、あるいはそれ以上遡る可能性がある。海善寺の大門田遺跡からは表裏に縄文を施した土器小片が出土しているが、これは同じく草創期の撚糸文系土器と考えられ、東部町最古の土器である。

縄文時代草創期より古い時代、すなわち旧石器時代の遺物は未だ確認されていない。しかし、鳥帽子岳・三方ヶ峰の山腹台地に位置する出沢奥の東入・西入・祢津の奈良原・滋野の型などは地形的にみて存在の可能性がある。奈良原では非常に古い石器が発見されているというので、今後、旧石器時代遺跡の存在が確認される可能性は高い。

縄文時代早期の遺物も確認されている。滋野の天神遺跡・和の中尾遺跡から出土している押型文系土器がそれで、未だ數は少ないものの、山形文・横円文が認められる。天神遺跡は所沢川扇状地の扇端部に当る。

前期に至ると遺跡数は俄に増加し、山麓地帯から扇状地上・河岸段丘上まで、選地にも幅がみられる。調査された遺跡としては花積下層式併行の尖底ないし丸底の土器を出土した祢津真行寺遺跡・諸磯C式併行土器を出土した和の大門田遺跡があげられ、今回調査された滋野塚穴遺跡からも前期土器が相当数出土している。

縄文時代最盛期の中期は八ヶ岳南麓を中心に中部高地にその華が開いたが、東部町の遺跡は中葉すぎの爛熟期から末葉の退廃期に属するものが多い。東信火山群山麓の海拔700~800mのペルト地帯に集中する傾向があり、戸立・不動坂・古屋敷・真行寺・桜畠・中原・たたら堂・辻田の各遺跡は、東部町を代表する中期の大遺跡である。戸立・不動坂遺跡は大石沢川扇状地扇頂近くに

當まれ、面積約60000m²に及ぶ広大な遺跡である。昭和5年に敷石住居址が発見され、全国でも最も早い指定に入る国指定史跡となった。昭和58年の範囲確認調査でも、2軒の敷石住居址、3軒の堅穴式住居址及びそれに伴う大量の遺物が検出されている。旧滋野村の小諸市への分村合併により遺跡は二分され、約三分の一は小諸市分になっているが、行政区域を超えて一体としての保存が望まれている。上記の外、滋野桜井戸遺跡からも敷石住居址が発見されており、注目される。

後期遺跡も町内各地に存在する。その中で代表的なものは成立遺跡と中原遺跡である。成立遺跡からは堀ノ内式から加曾利B式に至る良好な資料が出土しているし、中原遺跡では敷石住居址とそれに伴う堀ノ内式と考えられる土器が検出されている。

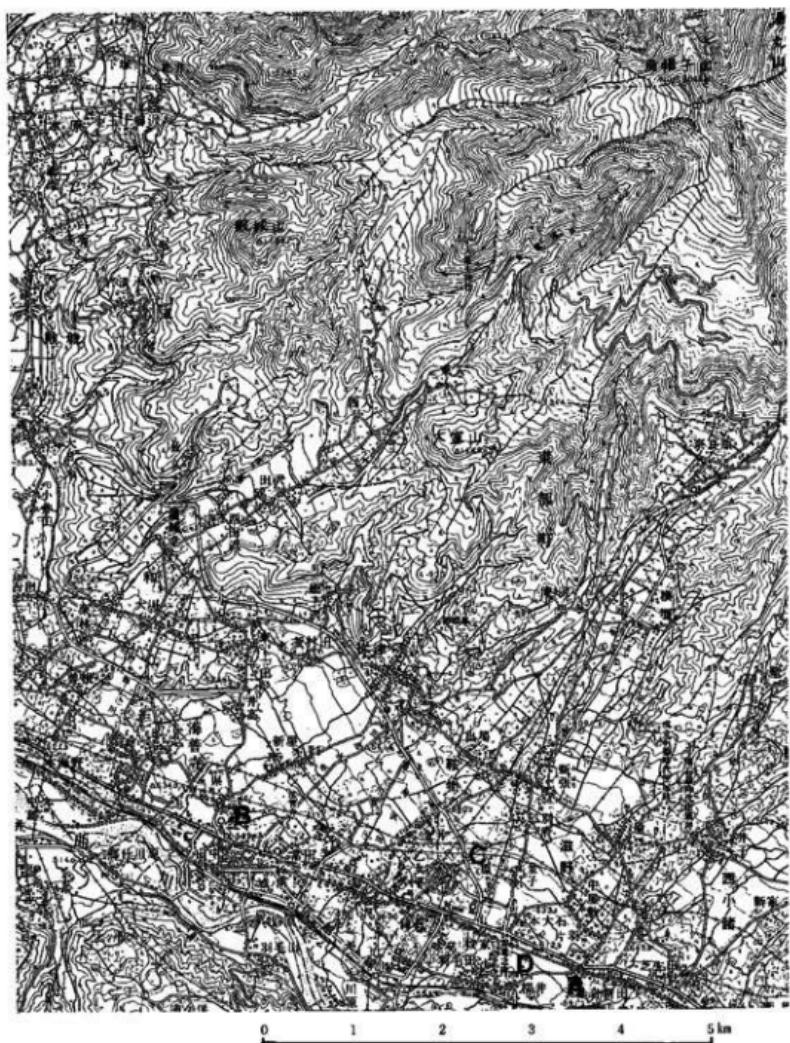
晩期の遺跡は他地方同様に激減して、町内では現在までのところ、末葉の浮線網状文をもつ水式土器の破片1点を出土した塚穴遺跡が知られているのみである。

弥生時代遺跡は全てが後期稻作水式期に属するもので、その立地は水田耕作を中心にしていたと考えられるだけに特徴的である。すなわち、押出扇状地の扇壠部からの湧水を開発に利用し得た河岸段丘上に圧倒的多数が存在しており、城の前・長縄手遺跡は比較的大規模が大きい。また、洪水に際して安全地帯であった井高から海善寺にかけての一帯にも集中がみられる。大川・栗林の山麓線集落下方の金原川・成沢川扇状地上に点々と存在するのは、良好な湧水が得られたからであろうか。次郎塚遺跡が代表的である。この時代は開発後進地で、從って大遺跡は少ない。

古墳時代に入ても開発はさして進まなかったらしく、遺跡の急激な増加・拡大は認められず、多くは弥生時代遺跡と重なっている。古墳は町内各地に約50基が点在しているが、和地區に過半数の32基が集中している。その中で、県指定史跡の中曾根親王塚古墳は一辺約40m、高さ約10mの東信地方最大の規模をもつ方墳で、葺石と埴輪の存在が知られている。内部主体は不明であるが、一応5世紀中頃に構築されたものと思われる。二子塚古墳は墳丘・石室とも略完存しており、人物埴輪をはじめ多くの埴輪が出土して注目された。王塚古墳は封土を失っているものの石室は完存しており、滋野の塚穴古墳、上記の二子塚古墳と共に町指定史跡である。東上田の児玉山古墳群は7基の小円墳より成り、完存するものはないが、山腹に當まれた群集墳として町内唯一の例である。弥生時代遺跡の集中地帯と古墳集中地帯はピタリと一致し、扇状地面の開発が遅々として進まなかったことを物語っている。

奈良時代に入ると文献史料が登場する。正倉院麻袋墨書の「信濃國小縣郡海野郷 爪工部君」と、「日本書紀」の「信濃國小縣郡郷里 大伴忍勝」がそれである。史料の分析は抜いて、弥生時代・古墳時代を通じて遺跡が最も集中した和地區から田中壙区にかけて『倭名類聚抄』所載の「童女郷」が成立して、ここを中心に東部町の本格的な開発が始まられ、平安時代遺跡は町内至る所で存在するようになるのである。

(塩入秀敏)



第1図 東部町の地形と調査遺跡位置図

第Ⅱ章 調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

東部町においては、昭和58年度に以下の5遺跡について、圃場整備等のため記録保存を目的とした、あるいは範囲確認を目的とした埋蔵文化財の発掘調査を実施することになり、昭和58年4月6日の東部町文化財調査委員会席上で提案された。

- ①塚穴遺跡（滋野地区） 県営圃場整備事業のため緊急発掘調査を実施しなければならない状況にあり、4～5月にかけて実施することになった。
- ②舞台遺跡（田中地区） 県立小県東部高校校庭拡張工事に伴う緊急発掘調査を、6～7月にかけて実施することになった。
- ③鞍掛遺跡（滋野地区） 県営圃場整備事業に先立ち緊急発掘調査を、7～8月にかけて実施することになった。
- ④天神遺跡（滋野地区） 県営圃場整備事業に先立ち緊急発掘調査を、8～9月にかけて実施することになった。
- ⑤戌立遺跡（滋野地区） 県営圃場整備事業の計画があるため、国指定史跡の範囲確認のための緊急発掘調査を、9～10月にかけて実施することになった。

第2節 発掘調査団の構成

1、第1次発掘調査団（担当：塚穴遺跡・舞台遺跡）

調査団長 五十嵐幹雄（日本考古学協会員）

調査主任 堀田 雄二（長野県考古学会員）

調査員 西沢 浩（　　〃　　）

宮原 洋子（　　〃　　）

西嶋 力

保坂 富男

和泉 直樹

協力者 渡辺待子・石川好子・中島ひで子・浅川正子・岩下公雄・高橋清子・岩下美子・坂田重利・高藤いつじ・小野沢きく子・高藤ふじ江・高藤輝子・中沢仁子・中沢マキ江・高藤とめじ・中沢広子・小林光男・星合たけよ

事務局 小林 清美 (東部町教育長)
池内 進哉 (東部町教育次長)
掛山 昌生 (社会教育係長)
関 方 (社会教育指導職員)

2、第2次発掘調査団 (担当:鞍掛遺跡・天神遺跡・成立遺跡)

調査団長 小林 清美 (東部町教育長)
調査主任 塩入 秀敏 (日本考古学協会員)
調査員 堀田 雄二 (長野県考古学会員)
官原 洋子 ()
西嶋 力
保坂 富男
調査補助員 尾見 智志 (明治大学学生)
塩崎 幸夫 (駒沢大学学生)
齊藤 正善 (同志社大学学生)
協力者 渡辺待子・中島ひで子・浅川正子・岩下公雄・坂田重利・高藤いつじ・小野沢
きく子・高藤ふじ江・高藤とめじ・高藤きくい・中沢広子・土屋八百枝・小林
光男・星合たけよ・齊藤信子・中村佳代子・久保田敦子・上田東高校日本史研
究班 (佐藤仁美・堀内真喜子・小林敬子・藤升裕子・前島信恵・前島理恵・滝
沢佐代子)
事務局 小林 清美 (東部町教育長)
池内 進哉 (東部町教育次長)
掛山 昌生 (社会教育係長)
関 方 (社会教育指導職員)

註

成立遺跡の調査は、今年度と来年度にわたって実施されるので、報告書は昭和59年度に
刊行することとする。

(事務局)

塚穴遺跡

第III章 塚穴遺跡の調査

第1節 発掘調査の経過

塚穴遺跡発掘調査日誌

- 4月2日（土） 今年度実施予定の発掘調査について打ち合わせを行なう。
- 4月6日（水） 発掘調査の具体的な実施時期・方法について打ち合わせを行なう。
- 4月15日（金） 東部町埋蔵文化財発掘調査会が発足。調査団の構成について話し合う。
- 4月16日（土） 本日より塚穴遺跡の発掘調査を開始する。現地調査を行ない、地形測量・現況写真撮影を行なう。珪ブロックの除去を行なう。
- 4月18日（月） 土層観察の為、テストピットを4ヶ所掘る。午後、発掘調査団会議を行なう。
- 4月19日（火） 試掘結果にもとづき、重機による表土除去を行なう。
- 4月21日（木） 発掘用具の点検と、不足器具の補充を行なう。
- 4月22日（金） 器材運搬、テント設営を行なう。グリッド（3×3m）設定を行なう。
- 4月23日（土） グリッド設定を引き続き行ない、計75グリッド（675m²）設定する。
- 4月25日（月） 鍬入れ式を行なう。東側よりグリッド掘り上げ作業に着手する。
- 4月26日（火） 土壌が数基確認され、土師器・内耳土器片など遺物も多量に出土する。
- 4月30日（土） 調査区中央東寄りにおいて竪穴式住居址が2軒確認される。
- 5月4日（水） 南西部の水田は造構検出面が開田時に破壊されていることが判明する。北西部の水田において造構（SK-4）が検出され、北側にグリッドを拡張する。
- 5月9日（月） さらに北側にグリッドを拡張する。発掘面積は750m²となる。
- 5月14日（土） 写真撮影の後、造構掘りに着手する。
- 5月19日（木） SB-1、SB-2に着手する。SB-2南東壁ぎわより遺物が集中して出土。
- 5月21日（土） SB-3、SB-4に着手する。造構のセクション実測を行なう。
- 5月25日（水） 各造構の実測に着手する。
- 5月28日（土） 調査区域全体写真及び周辺写真撮影。北東隅に土層観察用の深掘りを行なう。
- 5月31日（火） 深掘りトレンチの実測。ベンチ移動を行なう。午後、器材を撤収し、塚穴遺跡の発掘調査を終了する。

（宮原洋子）

第2節 調査結果

1、調査の概略

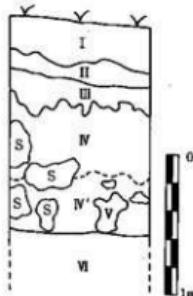
塚穴遺跡は、町指定文化財である塚穴古墳をとり囲むように広がっており、その面積はおよそ1.1万m²である。この一帯は、千曲川の河岸段丘とそれを覆う崖錐性の堆積が扇状地状地形を形成しており、ゆるやかな南西向き斜面となっている。

今回の圃場整備事業により、水田地帯に広がる遺跡西半の破壊が予想された為、そのうち最も保存状態が良好と思われる地点について発掘調査を行ない、記録保存を図ることとした(調査に至る経過についてはP5・6)。

最終的に750m²の発掘調査が実施されたが、その結果平安時代の堅穴式住居址4軒をはじめ、中世の集石造構2基・平安時代から中世にかけての土壙13基・溝状址1基・ピット21基等の遺構が検出された。また、縄文時代早期から江戸時代にかけての長期間に亘る、実際に様々で数多くの土器・石器類が出土した。

層序については下記のとおりである。遺構の多くはII層中から掘りこんでおり、III層あるいはIV層まで掘りこんでいる。遺物はほとんどII層中より出土しており、I層・III層からも若干出土している。なお、層序模式図はTドー1東壁セクション図をもとに作成した。

- I層………灰褐色砂質層。耕作土。発掘区北側では10cm程、南側では40cmを測る。遺物はほとんど見られない。
- II層………暗褐色砂質層。層厚は10~20cmと薄いが、しまりがある。小礫・ローム粒を多く含む。本遺跡の遺物包含層である。
- III層………ソフトローム層。小礫・スコリアを多く含む。多少しまりがあるが、再堆積である可能性が高い。
- IV層………ハードローム層。明黄褐色を呈し、粘性がある。礫を多く含む。
- IV'層………IV層の一部と考えられるが、礫・砂粒を多く含む。
- V層………赤褐色砂層。IV'層中にブロック状に入りこむ。スコリアと思われる。
- VI層………灰色砂層。極めて堅緻で、地元の人は「砂コビ」と呼んでいる。発掘区各所で露出しており(第3図においてスクリーントーンで図示)、赤堀一巳氏によれば、三方ヶ峰からの泥流層であるとのことである。

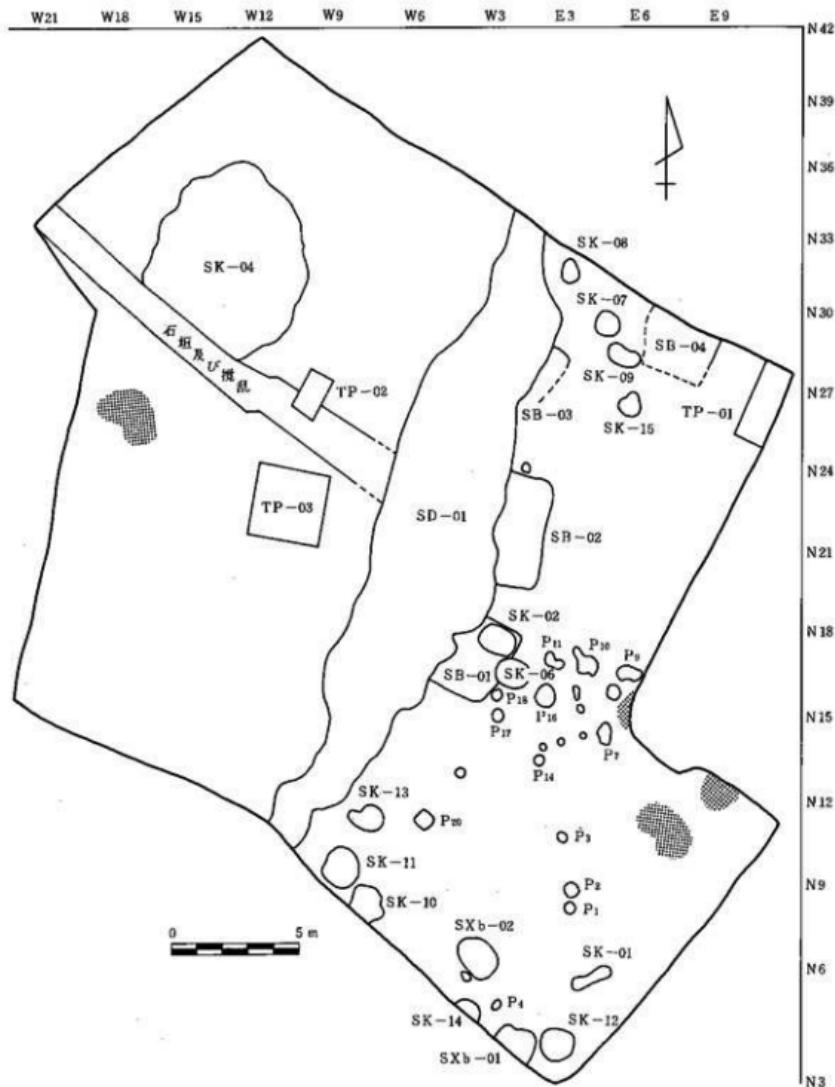


第2図 層序模式図



- 1. 墓穴道路 2. 古墳街道群 3. 不動坂道路群 4. 成立道路 5. 下原道路 6. 駒掛道路
- 7. 原道路 8. 外城道路 9. 真王道路 10. 東原地道路 11. 大皇子道路 12. 天神道路
- 13. 清水駆道路 14. 稲荷道路 15. 街屋道路 16. 片利道路 17. 西脇道路 18. 墓の下道路
- 19. 赤岩坂り道路 20. 大皇子1号墳 21. 大皇子2号墳 22. 庄司難古墳 23. 西宿古墳
- 24. 塚穴古墳

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第4図 発掘区全体図

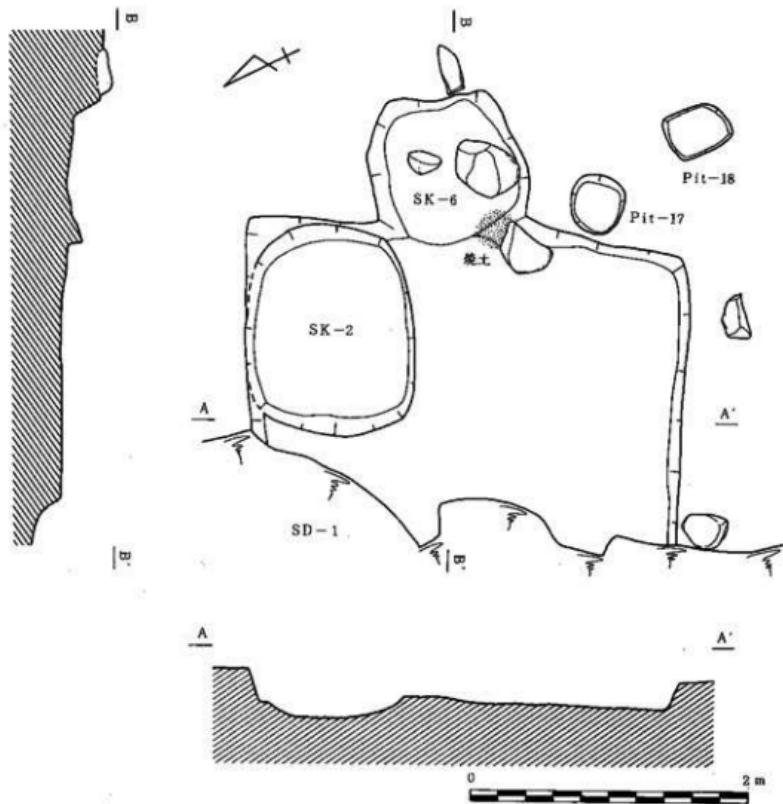
2、検出された遺構

(1) 住居址

今回の発掘調査によって4軒の住居址が検出された。いずれも平安時代に属する竪穴式住居址で、東壁にカマドが構築されている。

①第1号住居址（第5図）

本址は、発掘区南側のN18W3・N18W6グリッドを中心に検出された。東壁の一部が第6号土壙により切られ、また西側半分が第1号溝状址によって切られている。

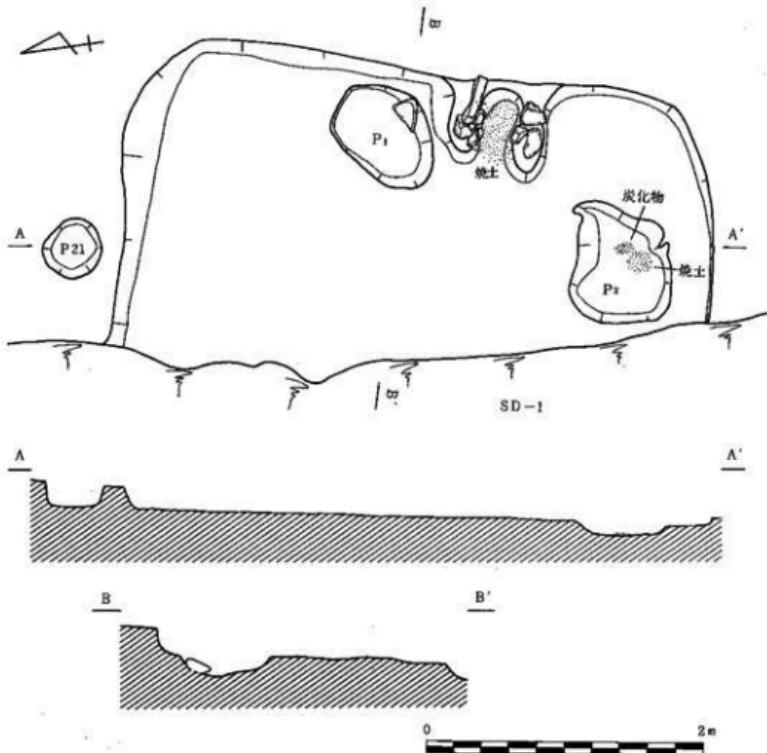


第5図 第1号住居址実測図

プランは方形を呈するものと思われ、南北3.2m・東西約2m(現在長)を測る。壁面はやや傾斜をもって検出され、北壁と東壁の壁高は25cm、南壁は20cmを測る。床面は、多少凹凸があるものの、ほぼ平坦で堅緻である。カマドは確認されなかったが、第6号土壌に切られた箇所に少量ながら焼土が検出され、またそのすぐ脇に構築石材と思われる礫が存在しており、あるいはこの位置にカマドが構築されていたのかも知れない。床面において柱穴は確認されなかった。本址東壁にPit-17・18が存在しているが、本址との関係は不明である。

なお、床面精査時に検出された第2号土壌は、当初本址に関連する施設と判断したが(図版参照)出土遺物および壁の状態等から、本址がある程度埋没した段階において、床面を切って構築された造構であることが判明した。

出土遺物は極めて少量で、しかもいずれも小片であるため図示し得なかったが、床面近くより



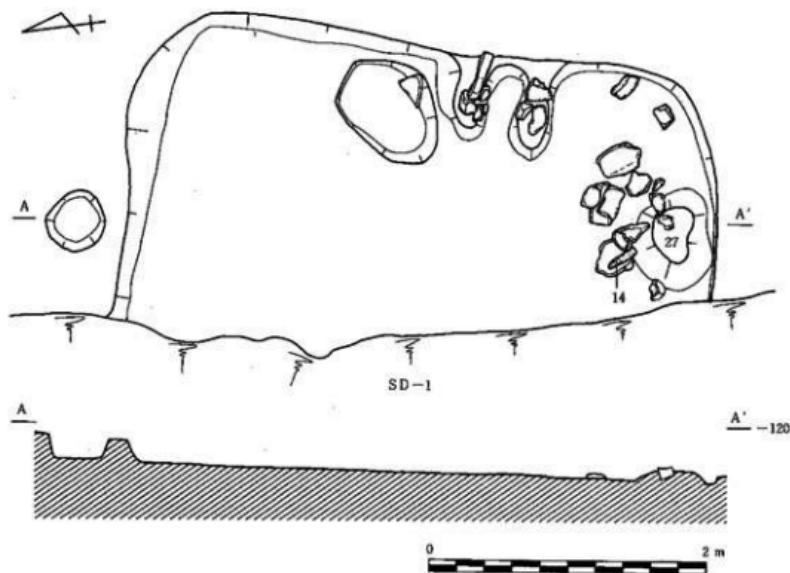
第6図 第2号住居址実測図

平安時代に属する土師器片が数点と古銭一枚（照寧元宝）が検出されている。このことから、本住居址は、平安時代後半のものと考えられる。なお、覆土上部では縄文時代前期と中期の土器片・石鎌等が出土しているが、いずれも流れ込みによるものである。

②第2号住居址（第6・7図）

N21W3・N24W3グリッドにおいて検出された第2号住居址は、第1号住居址と第3号住居址のほぼ中間に位置している。西側半分を第1号溝状址によって切られてはいるが、今回の調査で検出された4軒の住居址の中で、最も良好な状態で検出された。

プランは隅丸方形を呈するものと思われ、南北4.2m・東西約2.4m（遺存部最大長）を測る。地形が北東から南西にゆるやかに下る傾斜地である為、北壁の壁高は15~20cmあるのに対し、南壁はわずかに存在することが確認されたにすぎない。東壁も同様に、北壁寄りでは20cm前後を測るが、南壁寄りでは5cm程度であった。いずれの壁も70°前後の傾斜を有する。床面は平坦で堅緻である。カマドは東壁中央やや南寄りに構築されている。石組粘土カマドで、70×70cmの規模を有する。天井部は耕作等により破壊され、両袖とも袖石の大部分が露出しており、基部のみに粘土が確認されたにすぎず、遺存状態はあまり良好とは言えない。また第28図28~33などは、袖部の補強に用いられたと思われる状態で出土している。床面においてP₁・P₂が検出されたが、柱穴と



第7図 第2号住居址遺物出土状態

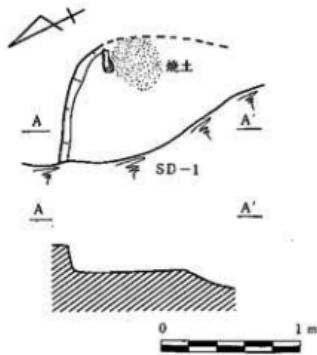
思われるピットは検出されなかった。なお、本址北壁脇に Pit -21があるが、本址との関係は不明である。カマド脇で検出されたP₁は、長径85cm、短径60cm程の楕円形を呈し、深さは最深部で床面から15cmを測る。偏平碟一個が据えたような状態で検出された以外は、遺物は全く出土しなかった。位置からして、貯蔵穴と考えられる。P₂は長径75cm・短径65cmの不整楕円形を呈し、深さは10cmを測る。南壁際において検出されたが、このピットには他に例のない上部施設が見られた。すなわち、第7図に示したとおり、床面と同レベルに偏平碟が並べられ、その上にローラムと粘質土の混合土で土まんじゅう状の土盛りを行なっているというものである。伴出遺物として、まず27の小形甌があげられる。これは土盛り頂部付近で、底部(木葉底)を南側に向けた状態で出土した。土器内部からは何も検出されなかつたが、この土器が本址において重要な存在であることは確かである。偏平碟の上に置かれた状態で出土した乳棒状石斧(第20図14)は、明らかに縄文時代の石器である。しかし、本址に伴なっていることもまた事実である。おそらく、石材の異質性・23cmに及ぶ長大さ等から目を引き、採集されてきたものであろう。再利用されたかどうかは不明である。土盛り裾部からは、壺(第25図1~8)や甌(第26図27)等がまとめて出土している。偏平碟直下からピット床面にかけて、焼土・炭化物がややまとまりをもって見られたが、特に最下底ではかなり集中して検出された。

本住居址の出土遺物は、カマド内およびP₁からの土器類・須恵器がほとんどで、貯蔵穴と思われるP₂や床面ではあまり見られなかつた。時期的には、やや古い様相を示す土器もわずかにあるものの、いずれも平安時代後半に属するものである。したがって、本住居址は、平安時代後半に位置づけられる。カマド内出土の磨石(第22図25)・P₂の乳棒状石斧は、もともと縄文時代に属する石器であるが、本址の住人の意志が反映されており、その意味からすれば、これらの石器もまた平安時代後半に属するものであると言うことができよう。なお、覆土上部からは、縄文時代前期から中期にかけての土器片が、ややまとまりを持って出土しており、また石錐・フレイクなどの石器も若干出土している。

⑧第3号住居址(第8図)

第2号住居址北側・第4号住居址西側のN30E 3グリッドにおいて検出された。西側の大部分を第1号溝状址によって切られ、また東壁(おそらく南壁の東側部分にかけて)も耕作によって破壊されており、北壁の一帯とカマド片袖周辺のみが検出されたにすぎない。

したがって、プランについてのデータはほとんど得られなかつた。一部検出された北壁壁高は15~20cmを測る。カマドは北東コーナーと思われる位置にあり、かなり破壊されてはいるが、石組粘土カマドであったと推察される。袖石1個と焼土(40×40cm)が検出され



第8図 第3号住居址実測図

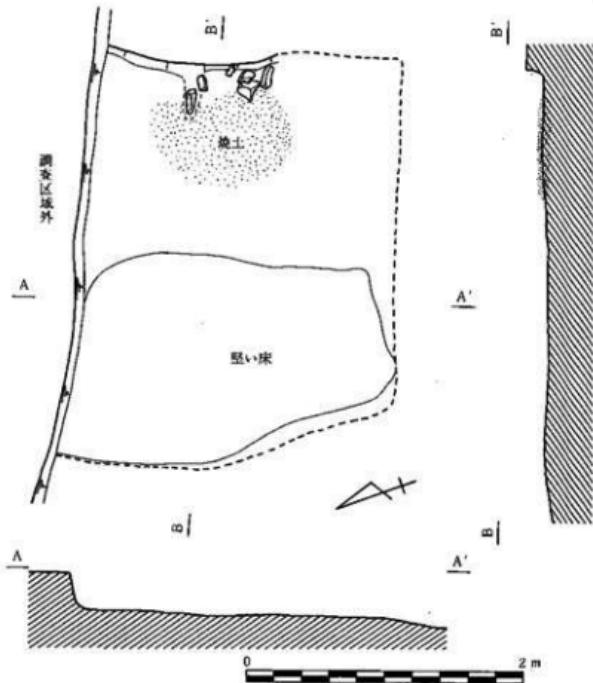
ている。床面はほぼ平坦で、堅緻である。柱穴と思われるピットは検出されなかった。

遺物は、須恵器の环がほとんどである。これらは、カマド脇に積み重ねたような状態で出土しており、いずれも平安時代後半に属するものである。

④第4号住居址(第9・10図)

発掘区北東隅、第3号住居址東側のN30E 6グリッドにおいて検出された。北側半分は調査区域外であり、また南側のほとんどは耕作によって破壊されており、東壁の一部とカマドの一部がわずかに検出されたにすぎない。

したがって、プランは不明と言わざるを得ない。しかし、堅い床の抜がりから本址のプランを推定することは可能である。おそらく南北3.5m・東西3.0m程の方形を呈する住居址であったと考えられる。東壁はほぼ直に立ち上がり、約15cmを測る。床面は、カマド周辺で一部破壊を受けているため不明だが、他はほぼ平坦で、極めて堅緻である。カマドは袖の一部と焼土(70×100cm)が検出されただけで、詳細は不明である。床面および本址周辺において、柱穴と思われるピット



第9図 第4号住居址実測図

は検出されなかった。

本住居址の出土遺物は、床面にはりつく様につぶれた状態で出土した二個体の鎧蓋と、平安時代後半に属する土師器・須恵器の壊の小片のみである。のことから、本址は平安時代後半(末期?)に属するものと考えられる。

(2) 集石土壙

発掘区南東端において、2基の集石土壙が検出された。いずれも集石内より内耳式土器片やカワラケなどが出土しており、中世に属する遺構と考えられる。

①第1号集石土壙(第11図)

N 3 W 3 グリッドにおいて検出された。南西側のごくわずかが調査区域外である。東西130cm・南北100cm(現在長)で深さ50cmの土壙内に、やや偏平で人頭大の礫が、ほとんどすき間なく入れられている。カワラケ小片が伴っている。

②第2号集石土壙(第11図)

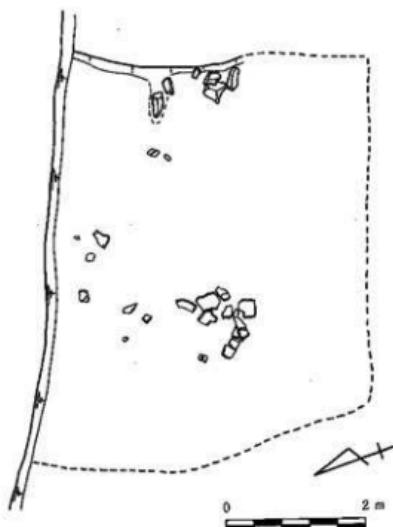
N 6 W 3・N 6 W 6 の両グリッドにまたがって検出された。長径170cm・短径90cm・深さ約20cmを測る土壙の壁ぞいに、並べられたような状態で礫が集積されていた。礫のない箇所に内耳式土器の破片がまとまっており、また集石のうちの一個が安山岩製の石鉢であった。なお、本址脇でSK-14・Pit-4・Pit-11が検出されているが、本址との関係は不明である。

(3) 土壙

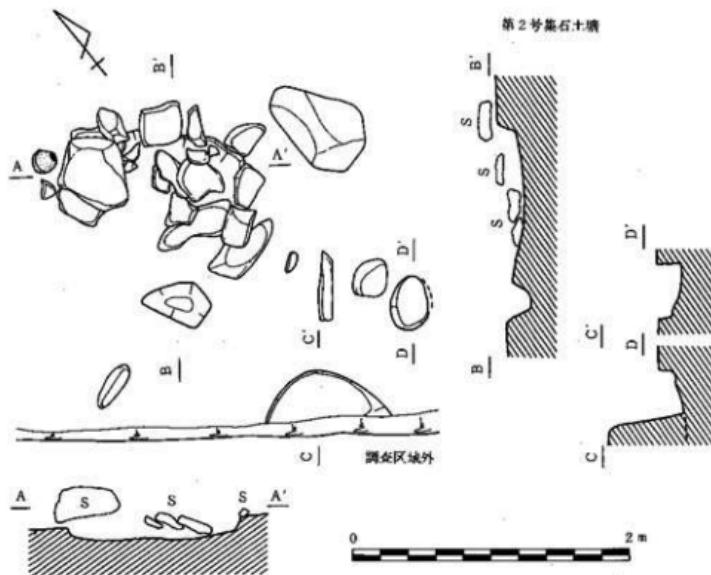
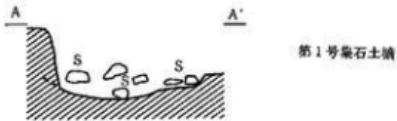
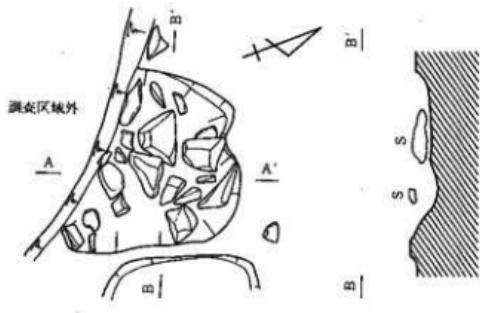
集石を伴わない土壙が、13基検出された。所属時期が明確なものは、第2・6・9・11・12・14号土壙の6基で、中世に属する土壙と思われる。他の7基は、平安時代およびそれ以降と思われるが、時代決定の根拠となる遺物は出土していない。

①第1号土壙(第12図)

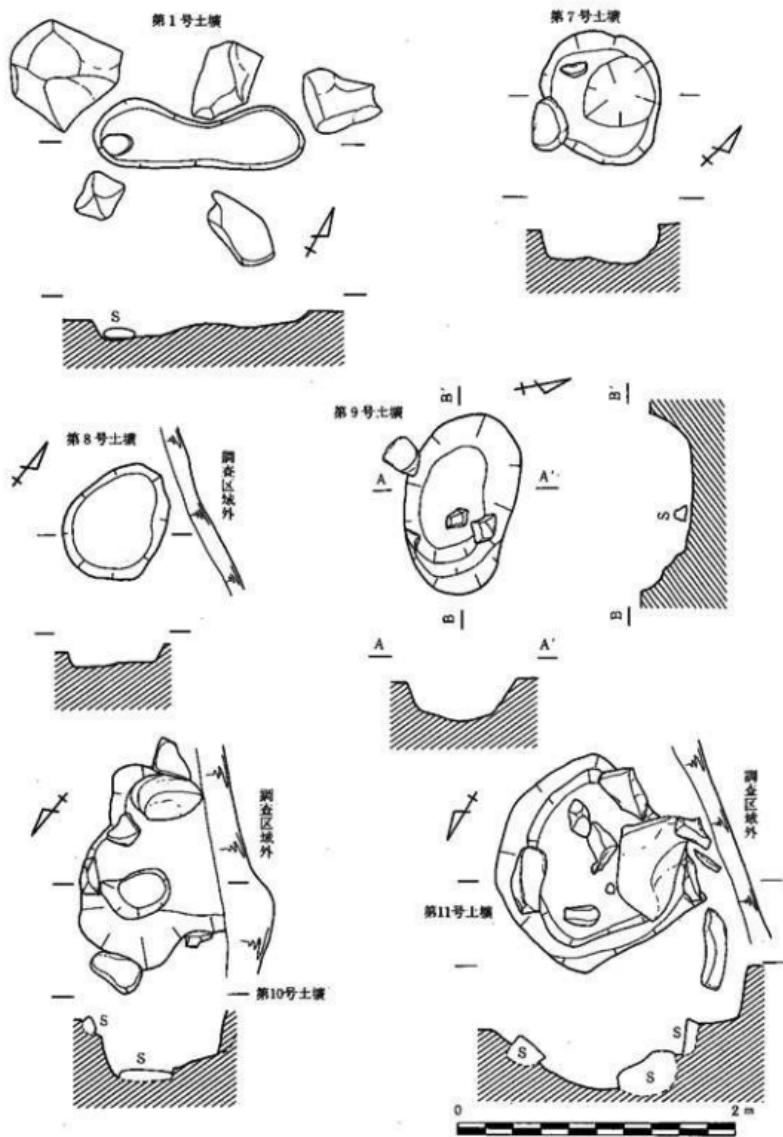
発掘区南東隅のN 6 E 3 グリッドにおいて検出された。本址の周辺は、本来田畠以下に含まれている礫が遺構検出面上に露出しており、あたかも礫群であるかのような様相を呈している。本址は礫と礫のすき間に細長く掘り込まれている。長径150cm・短径40~50cmで、深さは10cm前後を測る。覆土は、やや粘性を持つ暗茶褐色で、小礫を若干含んでいる。遺物は、一点も出土していない。



第10図 第4号住居址遺物出土状況



第11图 第1·2号集石土壤、第14号土壤实测图



第12图 第1·7·8·9·10·11号土壤实测图

②第2号土壤（第5図）

発掘区南側において検出された第1号住居址の床面を切った状態で、N18W3グリッドにおいて検出された。長径150cm・短径120cmを測り、小判形を呈している。深さは、中心部で約15cmで、浅いボウル状をなしている。下底部より土師質土器が数点出土している（第30図5他）。

③第4号土壤（第13図）

発掘区北西隅に近いN33W12~18・N36W12~18グリッドにかけて検出された。南側の一部を水田造成時の搅乱及び石垣によって切られている。長軸をほぼ南北にとり、7.3mを測る。短径は6.2mで、不整橿円形を呈する。深さは30~40cm程で、礫が數多く露出しているが、ほぼ平坦である。本址内においてP₁・P₂が検出されたが、柱穴とも考えられるが、判然としない。覆土は、上からI層・II層・III層と分層できる。I層は、茶褐色を呈する砂質土で、遺物はあまり見られなかった。II層は、粘性に富む黒褐色土で、縄文時代前期の土器・石錐・敲石・剝片をはじめ、土師器・須恵器から寛永通宝まで、多種多様な遺物が混在している。おそらく全て流れ込みによるものと思われる。III層は、砂粒と小礫からなる暗褐色土層で、遺物はほとんど見られない。水成層の可能性が強い。本址の時代・性格は不明である。

④第6号土壤（第5図）

N18W3グリッドにおいて検出された。第1号住居址の壁の一部（おそらくカマド部分）を切っている。径110cm程の不整円形を呈し、下底部が平坦な鍋底状で、深さは、約23cmを測る。覆土は全層が暗褐色土で、遺物の出土はみられなかった。第1号住居址との切り合いから、平安時代末期以降であることだけは確かである。

⑤第7号土壤（第12図）

第4号住居址の西側、N30E3グリッドにおいて検出された。不整円形を呈し、南北85cm・東西100cmを測る。深さはおよそ30cmで、ボウル状をなす。本址からは、土師器・須恵器の小片がわずかに検出されただけで、時代・性格は不明である。

⑥第8号土壤（第12図）

第7号土壤の北西側、N33E3グリッドにおいて検出された。プランは不整橿円形で、南北90cm・東西70cm・深さは15cmを測る。遺物は出土しなかったが、下部から炭化物片がわずかに検出された。

⑦第9号土壤（第12図）

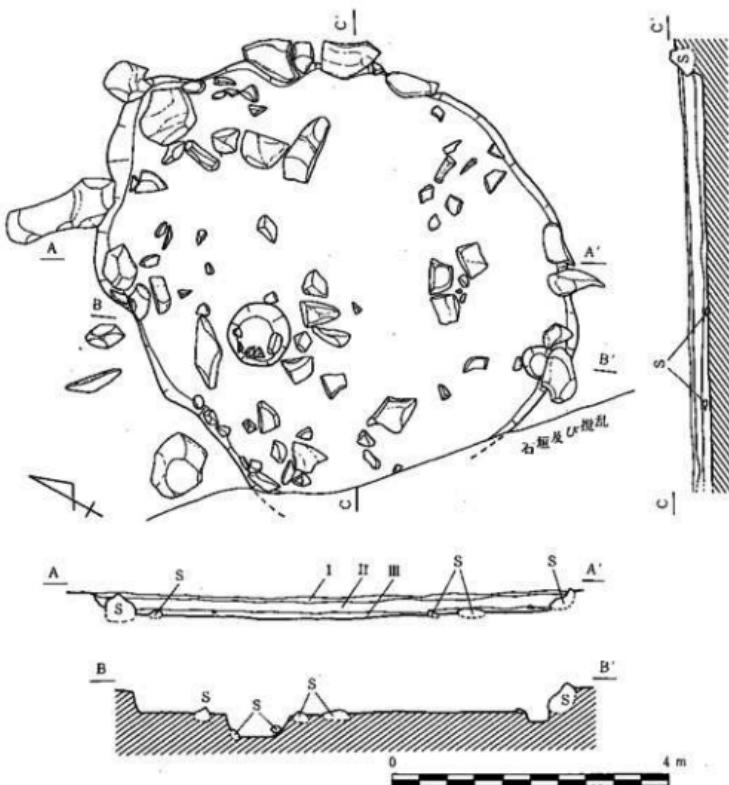
N30E3グリッドにおいて検出された。すぐ東隣で第4号住居址が検出されており、あるいは一部を切っているかもしれない。プランは、長楕円を呈しており、長径130cm・短径80mを測る。覆土は2層からなり、上のI層は暗褐色砂質土で、層下部に角礫が流れこんだ様な状態で3点検出された。その疊直下、II層（暗茶色砂質土）において、白磁底部破片と敲石・磨石が出土している。白磁が本遺構の時期を示すものと思われるが、伴出した2点の石器は、縄文時代の石器と考えられ、いかなる理由で伴出したかは不明である。偶然か転用かのいずれかであろう。

⑧第10号土壤（第12図）

N 9 W 9 グリッドにおいて検出された。第11号土壤の南東側に位置し、南西側の一部が調査区域外である。不整円形を呈し、140cm×130cmを測る。深さは30cm程で、断面は鍋底状である。遺物はほとんど出土しておらず、時代・性格は不明である。

⑨第11号土壤（第12図）

第10号土壤北西隣、N 9 W 9 グリッドより検出された。プランは、140cm×130cmのほぼ円形で、第10号土壤と類似する。深さは約35cmで、深いボウル状を呈する。最下部より「永楽通宝」と、一部に磨耗痕を有する丸石が出土している。



第13図 第4号土壤実測図

⑩第12号土壙（第15図）

第1号集石土壙の東側、N 3 E 3・N 3 W 3グリッドにおいて検出された。ほぼ円形を呈し、東西140cm・南北130cm・深さ15cmを測る。本址内および周囲から内耳式土器片が出土しており、中世に属する遺構と考えられる。また、釘状の鉄片も出土している。

⑪第13号土壙（第15図）

N 12 W 9グリッドにおいて検出された。南北90cm・東西130cmで、2基の土壙が重複したような形状を呈している。深さは10cm前後で、浅い鍋底状をなしている。遺物は、ほとんど検出されなかつた。

⑫第14号土壙（第11図）

第2号集石土壙の南側、N 3 W 6グリッドにおいて検出された。南側半分程が調査区域外である。検出部分における径は90cm程で、円形に近い形状であったと思われる。深さは15~20cmで、ほぼ直に掘り込まれている。内耳式土器片が出土しており、第2号集石土壙と何らかの関連がある遺構である可能性がある。

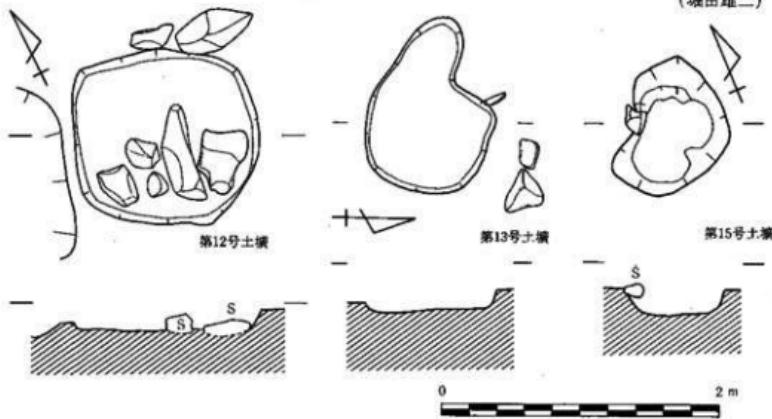
⑬第15号土壙（第15図）

第9号土壙の南隣、N 27 E 3グリッドにおいて検出された。形状は第13号土壙に類似しており、径はいずれも90cmを測る。深さは15~20cmで、浅い鍋底状を呈している。遺物の出土はない。

(4) 溝状址（第4図）

第8号土壙西側から第11号土壙西側にかけて、38mの長さを持つ第1号溝状址が検出された。多種に亘る数多くの遺物が出土しているが、水田の水路として中世以降掘られたものと思われる。

（堀田雄二）



第14図 第12・13・15号土壙実測図

3、出土した遺物

(1) 繩文時代の遺物

① 繩文式土器 (第15図1~25 第16図26~46 第17図47~77 第18図78~97)

発掘調査で出土した縄文式土器はおおよそ100点ほどを数えている。また、今回調査対象区域には入らなかったものの、本来は本遺跡の一部と思われる地点から、良好な土器が多数発見された。この地点は、調査区域から東方に20~30m程離れた地点である。これらについても本報告に併せて説明を加えたい。なお、これらについては最後に図面番号を列記しておくこととする。また、発掘調査で得られたもののうち、遺構に伴なうものは少なく、グリッド出土のものと含めて説明を加えることとする。次に、本遺跡出土の土器は小破片が多いものの、4群に大別して説明を加えたい。

第1群の土器 (第15図1~3)

早期に含まれる土器を一括することとする。

本群に含まれるのは、1~3の3点のみである。いずれも山型押型文が施されている。1は口縁部片である。押型文の施しはやや浅く不明瞭であるが、口唇部から縦に施文されている。また口唇部には斜めに刻み目が巡らされている。胎土には黒雲母・金雲母・石英粒が多量に含まれており、やや粗い。色調は暗褐色を呈する。2も口縁部片である。押型文は横位に施されている。やはり胎土には、量は少ないものの黒雲母・金雲母・石英粒を含む。色調は赤褐色を呈する。3は胴部片である。色調・胎土は2に酷似する。押型文は横位に施されている。

第2群の土器 (第15図4~25 第16図26~46 第17図47~77)

前期に含まれる土器を一括することとし、さらに次のように分類する。

1類 縄文を主文様とする土器 (第15図4~25 第16図26~46)

2類 刻み目文あるいは刺突文を主文様とする土器 (第17図47~58)

3類 沈線文を主文様とする土器 (第17図59~77)

1類 縄文を主文様とする土器

本類に含まれるのは、縄文のみが施されたものばかりで、必ずしも明確に時期区分ができるものではない。しかしながら、前期にみられる繊維を含有する特徴により分類した。含有量の多寡はあるものの、いずれも繊維を含んだ土器である。文様構成等により3タイプに分けて説明を行なうこととする。

1 残り糸文の施されるもの (第15図4)

本例1点のみである。器面上部と下部に残りの異なる縄文が施される。その間隙は無文帶となっている。胎土・焼成ともよく、比較的堅硬な土器である。色調は淡赤褐色を呈する。

2 無節縄文の施されるもの（第15図5～7）

5は口縁部破片である。ほぼ器面全体に縄文が施されているが、不揃いである。胎土には石英粒、雲母がやや多く含まれる。6は施文が不明瞭であるが、わずかに縄文が認められる。小石粒を多く含み粗い胎土であり、成形も粗雑である。色調は黒褐色を呈する。7は器面全体に縄文が施されている。縄文原体が結節部分をもち、その部分が波状に残される。胎土も良く、かなり堅緻な土器である。色調は赤褐色を呈する。

3 単節縄文の施されるもの（第15図8～25 第16図26～46 第17図47～58）

本類の中で主体を占めるものである。文様構成により2種に分けて説明を加えたい。

(1) 羽状構成をとらない単節縄文の施されるもの（第15図8～25）

8は口縁部片である。口唇部には斜めに間隔を保って刺突が巡っている。器面全体にR L縄文が施文される。胎土、焼成よく堅緻な土器である。色調は黒褐色を呈する。その他は全て胴部片である。そのほとんどが器面全体に縄文が施されている。しかしながら、器面が粗いものが多く、施文が不揃いとなっている。胎土には雲母、細かい石英粒を含むものが多く、また焼成がやや不良のためか脆弱なものが多い。色調は赤褐色を呈するものが多い。10は比較的大きい破片であるが、やはり施文がかなり不揃いである。ほぼ一面にR L縄文が施されているが、施文の強弱が顕著に表われている。また一部縄文が重なり合ったり、隙間があつたりする。17は縄文原体が粗いのであろうか、施文に規格性がみられない。22はS D-01C区内の出土である。これは縄文がやや間隔を保ちながら施されており、他と異なる。24はSK-04内の出土である。

(2) 羽状構成をとる単節縄文の施されるもの（第16図26～46 第17図47～58）

羽状構成をとる単節縄文の施されるものには、2種の縄文原体を使用して羽状縄文を構成するが、その両者が結束されないものと結束されるものがある。また結節部分をもって施文にアクセントをもつものがある。

26～31は比較的整った羽状縄文を有するものである。26は相当太い繊維を含んでいたらしく、かなり器面が粗くなっている。また胎土には石英粒、雲母を含みやや脆弱な土器である。施文には規格性が認められない。縄文の施されない部分も残されている。27は胎土、焼成ともに良好で比較的堅緻な土器である。L R縄文を主体としながら、一部にR L縄文を配し羽状縄文を構成している。28は細い繊維を含むものの堅緻な土器である。2種の縄文がほぼ等間隔を保って施される。おそらく5～6条の縄文が1単位となって羽状縄文を構成するらしい。29は胴部破片であるが、胴の丸味が強い。胎土、焼成よく堅緻である。器面のほぼ全面に縄文が施されており、また施文もしっかりしている。下位にゆくに従って器厚が次第に厚みを増しており、底部に近い部分であろう。30・31は小破片であるものの、2条の縄文の接点が顕著にみられる。いずれも器厚7mm前後を測り、比較的薄手である。胎土、焼成等は良い。32～36はいずれも2種の原体を使用し、羽状構成をとると思われるが、施文が粗雑で必ずしもその意図が十分に反映されていないもので

ある。32はR L縄文が間断をもって施され、またL R縄文間に無文部分が残る。33は縄文の条が描っておらず、縄文の交錯する部分がみられる。34は施文が不明瞭であり縄文の施されない部分が多い。35は縄文がわずかに認められる程度の施文である。36は器厚7mm弱のやや薄い土器である。施文は比較的しっかりしている。これらの土器は35が黒褐色、他が赤褐色を呈し、胎土良好で堅敏な土器である。37・38は口縁部片であり、いずれも口縁部がやや外反する。前者は施文の深い部分と浅い部分とがあり、器面の起伏が強く施文は粗い。後者はやや上下に長い破片であり、胴部にかけての膨らみがわずかに認められる。施文は口縁部直下の縄文と、破片下部にみられる縄文とが明瞭なもの、その他の部分はわずかに縄文がみられる程度である。40・41は底部直上の土器片と思われる。後者は2種の縄文間に明らかに無文帯が残され、その部分にはおそらく指頭によると思われるなで整形がなされている。また縄文は直線というよりは、やや曲線的に施されている。42は2種の縄文原体を結束して羽状縄文を構成している。縄文の施文も整っている。胎土には石英粒を非常に多く含んでいる。外面黒色、内面赤褐色を呈する。

43~46は縄文原体に結節をもつものと思われる。43は縄文がほぼ全面に施されている。結節部分を境として縄文の方向が異なる。また異種の結節により、曲線的な条をもつ縄文が施されている。施文の方法はやや粗雑であるが、内面形成はていねいである。44は無文帯を残しながら、その上下部に縄文施文をもつ。縄文は結節部分の回転による施文が行なわれている。45も施文手法は前者に似ている。

2類 刻み目文あるいは刺突文を主文様とする土器

47~49は細い粘土紐を貼り付けた浮線文をもち、その上に刻み目の施されたものである。粘土紐は47・48のように曲線的なもの、49のようにほぼ直線的なものがある。また48は粘土紐間に細い条線がわずかに認められる。これらは胎土に細石粒を含むものの比較的良好で、色調は淡赤褐色を呈する。50~55は地文に縄文をもち、その上に間隔をもって粘土紐を貼り付け、さらにその上に刺突文の施されたものである。いずれも胎土、焼成よく堅敏な土器である。色調は51が暗褐色、他が赤褐色を呈する。57は口縁部破片である。口唇部から斜行する粘土紐が貼り付けられ、刻み目文の施される粘土紐が横位に巡っている。赤褐色を呈し、堅敏な土器である。58は他と異って、器面に直接に刺突が施され、また竹管による刺突がなされ、その中心部に粘土の盛り上がりを残している。胎土に雲母をわずかに含み淡赤褐色を呈する。

3類 沈線文を主文様とする土器

本類の土器は、地文に半截竹管による集合条線をもち、その上に粘土の貼り付けの施される土器である。粘土の貼り付け文は、59のように中心に凹みをもつ円文をもつもの、あるいは63・64のように縦長の粘土粒をもつもの、あるいは62のように、おそらく2個1対でかなり小型の粘土粒をもつものとがある。これらは胎土に小石粒をやや多く含み、粗いものが多く、また色調は赤

褐色を呈するものがほとんどである。

第3群の土器（第18図78～96）

中期に含まれる土器を一括することとする。

本群の土器は、78～88までの縄文を主文様とする土器、89のように沈線による区画をもつ土器、90～93のような綾杉状沈線をもつ土器、94～96のように充填された縄文をもつ土器がある。78～88は縄文を主文様とするものである。特徴的なものをみると、79・80は縄文がある程度間隔をもって施されている。78も含め3点は、胎土、色調等酷似する。81は胎土に石英粒、黒雲母、金雲母を多量に含み粗い。88は地文に縄文をもち、その上に粘土の陳帯をもつ。次に89は、数条の沈線をもち、その間に刺突が施される。その沈線間をさらに上下に結び、区画内に斜行する沈線をもつ。胎土には金雲母、黒雲母を多量に含んでいる。次に90～93は綾杉状沈線文をもつ土器である。いずれも胎土、焼成よく、成形もていねいである。94は台付きの底部である。2重の沈線間にRL縄文が充填されており、その上部には斜行する沈線が認められる。95は曲線的な沈線によって区画され、その中に縄文が充填される。96は口縁部片である。平行する数条の沈線間に捺りの異なる縄文が充填されている。95・96は器厚6mm前後を測り、やや薄手である。

第4群の土器（第18図97）

晩期に含まれる土器とするが、本例1点のみの出土である。

口縁部がやや外反し、頸部から胴部にかけて膨らみをもつ壺形土器である。施文には浮線網状文がみられる。胎土は非常に精練され、成形もていねいに行なわれている。

以上縄文式土器について、調査において出土したもの、さらに調査区域周辺から表採された土器も含めて説明を加えてきた。早期の押型文土器から前期の繊維を含み、縄文原体や施文手法に特徴のある一群、さらに諸磯系土器の一群众、また中期の土器もわずかにみられ、晩期終末期の水式土器も1点含まれるなど、各期においてまとまりのある出土状況をみせている。特に、前期の繊維土器については、そのほとんどが調査区域外で表採されたものではあるものの、非常に良好な資料と言えよう。

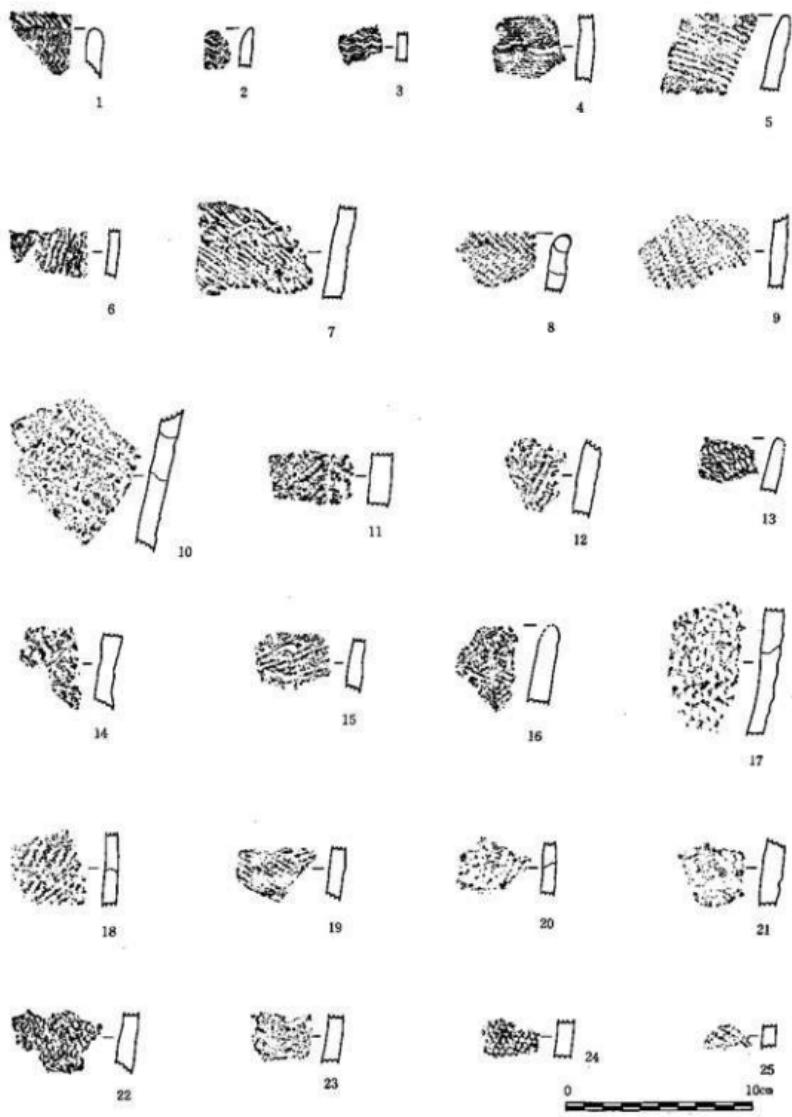
最後に今回調査区域外において表採された土器について列記しておくこととした。

第15図 4 5 7 8 10 11 12 14 15 16 17 18 19 20 21

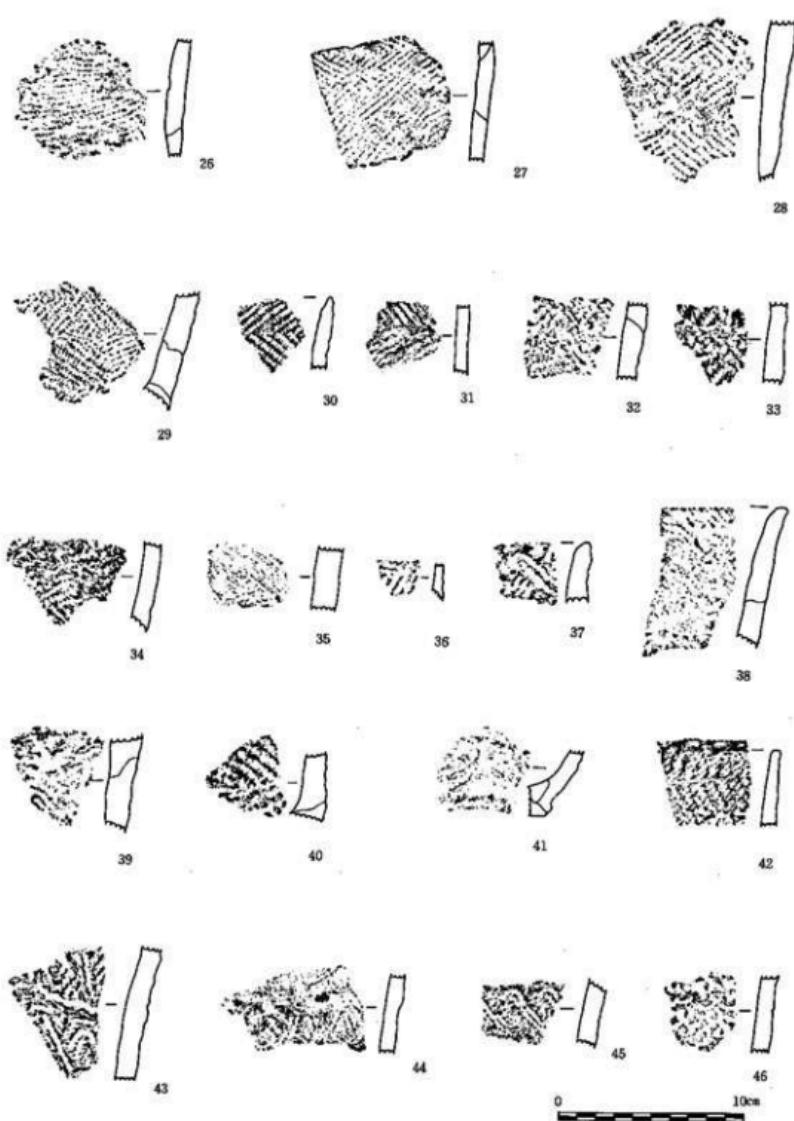
第16図 26 27 28 29 31 32 33 34 36 37 38 39 40 41 42 44 46

第17図 58

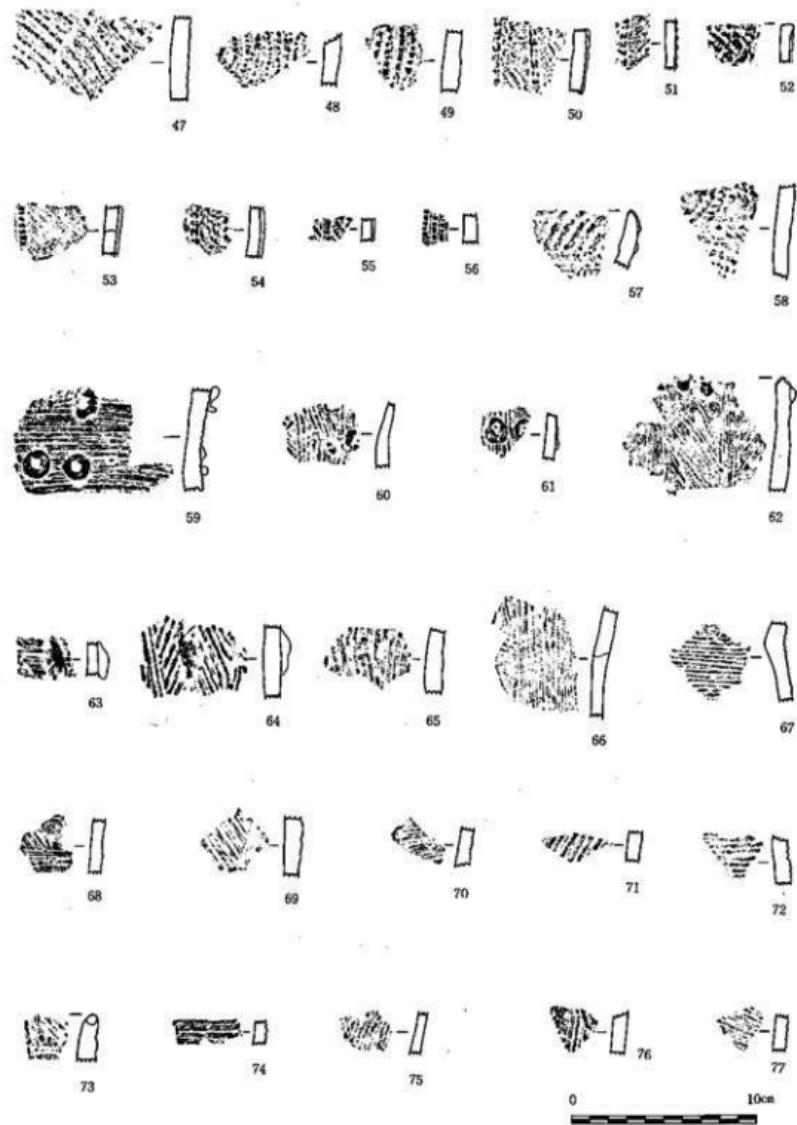
（西沢 浩）



第15図 繩文式土器(1)



第16図 繩文式土器(2)



第17図 繩文式土器(3)



第18図 縄文式土器(4)

②石器（第19図～第22図・第1表）

塚穴遺跡では、192点の石器・石製品が出土している。種類は様々で、16種におよぶが、その種類別の内訳は次のようなになる。

石鎌6点・石錐2点・ビエスエスキュー1点・石匙1点・打製石斧3点・乳棒状石斧1点・敲石11点・磨石8点・凹石1点・絆石製品（破片も含む）7点・フレイク63点・チップ74点・石核および石核状石器8点・石庖丁2点・砥石2点・石鉢2点

このうち、石庖丁・砥石・石鉢おのおの2点ずつ、計6点を除く186点は、縄文時代に属するとと思われる石器である。しかし、今回の発掘調査において、縄文時代の遺構は全く検出されなかつたので、これらの石器は、縄文時代の土器類と同様、本遺跡内の別地点あるいは近隣遺跡から土砂と共に移動してきたものと思われる。なお、特殊な例として、第2号住居址出土の乳棒状石斧や、第9号土壙の敲石と磨石のように、人為的に持ちこまれたと思われる事例も2・3ある。

石錐は、全て黒曜石製の無茎石錐である。1は、錐身がやや短いものの、早期によく見られる錐形鐵である。本遺跡では、数点の山形押型文土器が出土しており、これに伴なうものであろう。2と3は、浅い抉りを有する中形の石錐で、全体的に分厚い。4は、幅に対して錐身が長く、細長い形態を呈する。正面の一部に節理面を残しており、基部より先端部側の方が厚くなっている。5は丁寧な調整が施されており、ごく薄く左右シンメトリックに仕上がっている。両側縁が内湾している点も特徴的である。6は、円基に近い平基の大形石錐である。調整は粗く、あまり厚みが減じられていない。1を除く5点は、いずれも前期もしくは中期前半に属するものと考えられる。

2点出土した石錐は、いずれもつまみ部を有するものである。7は一般的に見られる形態であるが、8は特徴的な形態を呈している。スクレイパーからの転用品かもしれない。

対をなすつぶれ痕を有するビエス・エスキューが1点出土している。上下の対の他に、左右でも対をなしている。相当剥離が進行しており、断面が薄い紡錘形を呈している。

縦長剝片を素材とした石匙が1点出土している。しかし、石器形態は横長で、素材の用い方の特異性を物語っている。これは、剝片を得る際の打点が正面左側にあるため、最初に打点周辺を薄くする為の調整を加えている点からもうなづけるが、結局十分に薄くし得なかった打点周辺に、使用時無理な負荷が加わり、著しい摩耗痕が生じたことからも証明できる。このことは、石器の形態（型式）は素材に左右されるのではなく、製作者の意志（本例では、横形の石匙を作るという意志）の現われであることを強く反映している。

打製石斧は3点とも欠損品である。遺存状態が最も良好な12は、短冊形を呈する小形品であるが、相当使用されたようで、正面下部に磨耗痕が看取される。11は刃部のみであるが、おそらく短冊形であったと思われる。裏面はフラットであるため、片刃状をなす。13は、偏平礫を素材として、両側辺を作出したもので、刃部を欠くが、本例も短冊形を早していたものと思われる。

23cmを超す長大な乳棒状石斧が出上している。刃部および斧頭部に欠損が看取されるが、いずれも使用時に生じたもので、欠損後もそのまま使用していたようである。また、正面の斧頭部に黒色・正面全体に茶色の付着物が見られる。黒色の方はタール状で、使用時に何らかの必要性が生じて塗られた天然タールと思われる。茶色の方は、土中の鉄分の付着のようであるが、判然としない。あるいは、出土状況（P15参照）に関係あるのかもしれない。

敲石は11点出土している。15~17などの小形品と、18~20などの大形品に分類できる。小形品は敲打痕が明確に残っているのに対し、大形品はあまり明瞭ではない。また、大形品に見られる磨耗痕は、使用時に生ずる『手ズレ』状であるのに対し、小形品の16・17などは、磨石としての機能も兼ねそなえているようである。

8点出土した磨石は、ほとんど径7cm前後の小形品で、25や27は例外的存在である。この25であるが、第2号住居址のカマドの構築石材として再利用されていた。正面中央のキズは、再利用された際に敲打されて生じたキズとも考えられる。また24は、第11号土壙最下部より永楽通宝と共に出土した。中世の石製品である可能性も否定できない。

火形の凹石が1点出土している。正面に二箇所・裏面に一箇所浅いくぼみが看取される。また表裏内面に、比較的顕著な磨耗痕も残されている。さらに、上・下に打ち欠きがなされており、漁撈用その他の石錐としても利用されているようである。

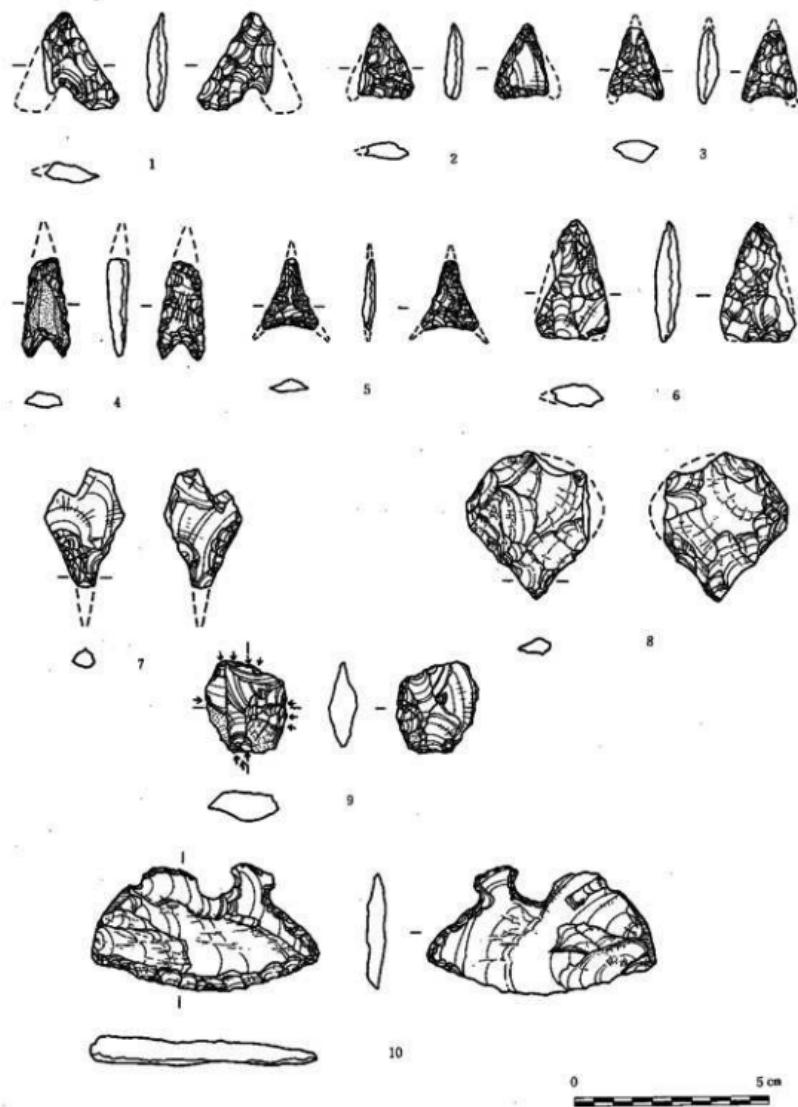
軽石製浮子が1点出土している。小さな軽石に、正面から穿孔しようと試みているが、あと数mmを残して貫通していない。浮子の未製品である。孔の直径は、およそ6mmを測る。いかなる理由で穿孔を中断したかは不明である。なおこの他に、穿孔のない軽石や破片が6点出している。

図示しなかったが、フレイク・チップが合計137点出土している。この数は、本遺跡より出土した縄文時代の石器の7割強に相当する。しかし、これらの多くは石錐や石錐などの製作時に生ずる石屑であり、使用痕や加工痕のあるごくわずかを除くと、あまり重要ではない。ただし、本遺跡出土の石錐などが遺跡内で製作されたことを裏付ける資料となりうるし、石器製作技法の解説にも役立つということを考えると、フレイク・チップと言えども、極めて重要な存在である。

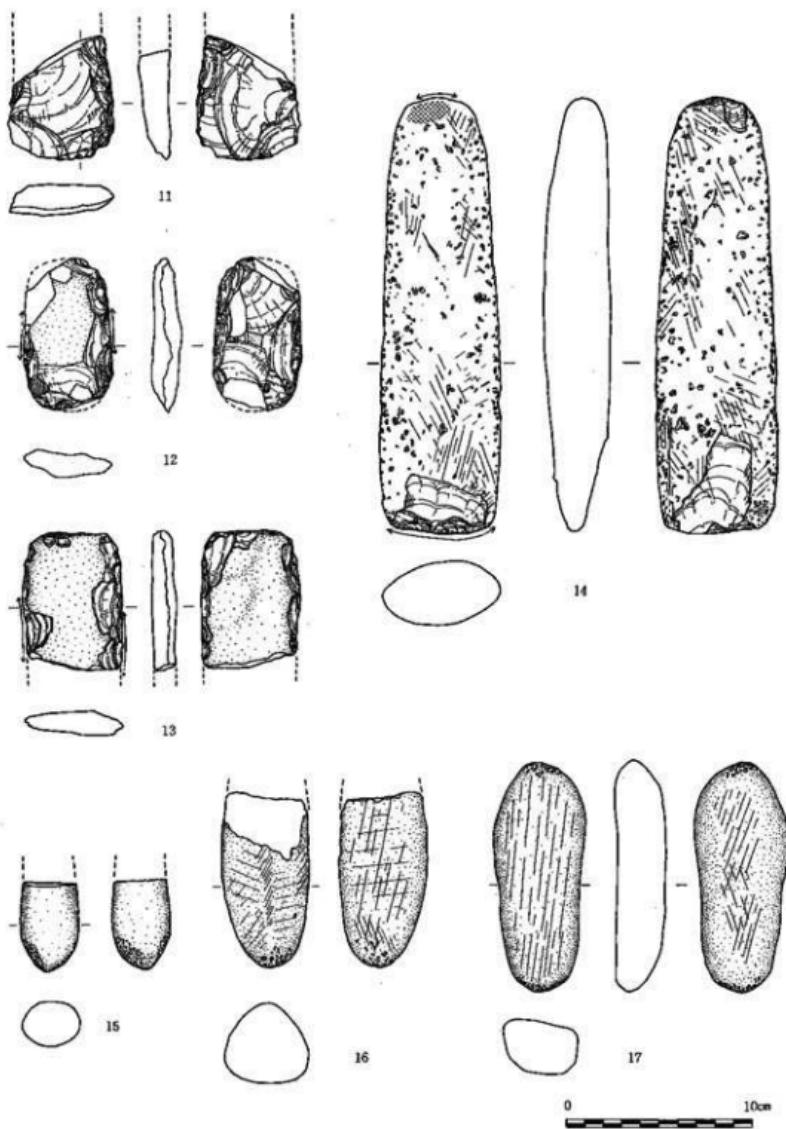
石核および石核状石器が8点出土している。縄文時代全般を通して言えることだが、石核から剥片を得る技術は極めて稚拙で、しかも多くの場合直接打法によっている。その結果として、石核は定形化せず、剥片の剥離できそうな箇所を次から次へと打ち欠いていくという傾向が見られる。この傾向は、前期後半から中期末にかけて序々に強まり、後期から晩期にかけては逆に技術の向上が見られる。このことは、石材（特に黒曜石）の需要と供給の状況と密接な関係がありそうであるが、現在のところ明言はできない。

塚穴遺跡より出土した186点の縄文時代の石器について、ごく簡単に説明してきたが、この中で特に注目したいのは、搬入された石器類である。このことは、平安時代末期から中世という時代に関係があるのか、その他の理由によるものか不明である。同様な事例の集積を待ちたい。

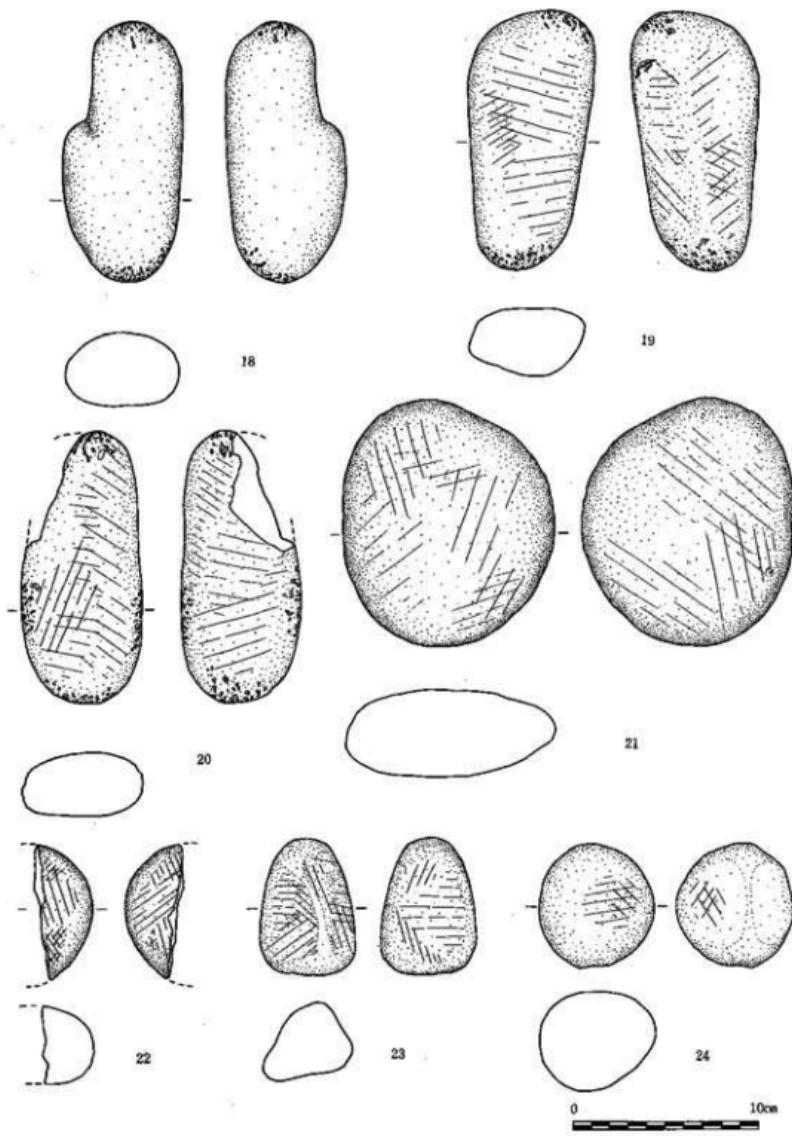
（堀田雄二）



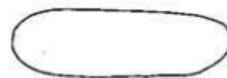
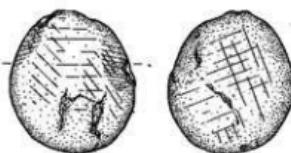
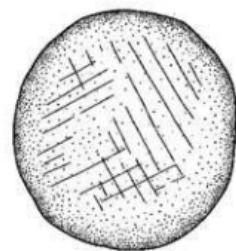
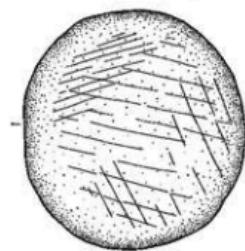
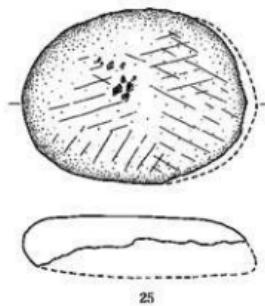
第19図 石器実測図(1)



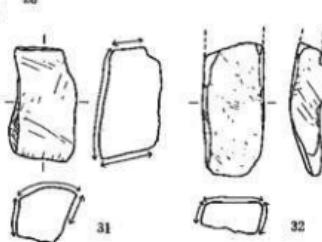
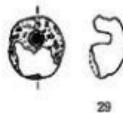
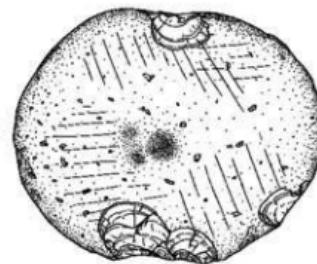
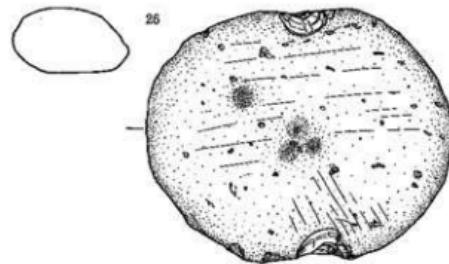
第20圖 石器実測図(2)



第21図 石器実測図(3)



29



0 10cm

第22图 石器实测图(4)

第1表 塚穴遺跡出土石器観察表

単位はcm及びg
()内数値は現存値

No	器種	出土地点	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	残存状態	備 考
1	石 箸	S K - 4	黒曜石	2.15	1.70	0.45	0.85	片側脚部欠損	
2	#	N 3 W 9	#	1.65	(1.20)	0.40	0.65	片側縁欠損	
3	#	S K - 4	#	(1.60)	(1.20)	0.45	0.65	先端部・片側脚部欠損	
4	#	#	#	(2.20)	1.05	0.45	0.85	先端部欠損	
5	#	S B - 1	#	(1.55)	(1.25)	0.25	0.25	先端部両脚部欠損	
6	#	N 12 W 9	#	2.60	1.60	0.55	1.70	片側縁・基部欠損	
7	石 錐	S D - 1	#	(2.65)	1.70	0.45	1.35	錐部欠損	
8	#	N 6 W 6		3.25	(2.70)	0.75	7.20	無縁二ヶ所欠損	
9	ビエス・エスキーネ	N 24 W 12	黒曜石	2.05	1.80	0.70	2.30	完 形	
10	石 鋏	N 9 W 6	チベート	2.80	5.00	0.60	7.60	#	
11	打製石斧	N 12 W 9		(6.60)	5.60	1.80	82.00	斧頭部欠損	
12	#	N 15 W 9		(8.10)	4.80	1.60		刃部・斧頭部欠損	正・裏面一部剥落
13	#	N 24 E 9		(7.40)	5.30	1.40		刃部欠損	
14	乳棒状石斧	S B - 2		(23.30)	6.50	3.60	984	#	斧頭部にタール(?)付着 敲石としても使用
15	敲 石	Z		(4.80)	3.10	2.50	59	上半欠損	
16	#	S K - 4		(9.30)	4.70	4.20	246	#	
17	#	N 15 W 12		12.20	4.95	3.20	328	完 形	
18	#	S K - 9		13.90	6.50	4.20	556	#	
19	#	N 24 E 6		13.80	6.70	3.60	501	#	
20	#	#		14.60	6.50	4.30	544	片側縁欠損	
21	磨 石	#		13.20	11.30	4.70	1011	完 形	
22	#	S B - 1		(7.20)	(3.10)	(4.40)	103	1/2残存	
23	#	S K - 9		7.30	5.10	4.20	222	完 形	
24	#	S K - 11		6.70	6.20	5.30	285	#	
25	#	S B - 2		9.40	(11.90)	2.70	333	表面側欠損	白石としても使用 カマド内より出土
26	#	Z		7.70	6.70	3.80	279	完 形	
27	#	S D - 1		12.80	11.80	3.70		#	スス付着
28	凹 石	Z		13.60	16.40	5.90		#	上下に打ち欠きあり 石難か(?)
29	浮 子	S B - 1	純 石	3.30	3.00	(1.80)		正面一部欠損	未製品
30	石 滾 丁	#		(3.40)	(4.20)	7.00		刃部・両側縁欠損	裏面一部剥落
31	砥 石	#		6.20	3.70	3.50		完 形	6面を使用
32	#	N 12 W 12		(7.10)	3.30	1.90		一部欠損	3面を使用

(2) 弥生時代の遺物

①弥生式土器 (第23図1~3)

包含層から微量の出土があったにすぎない。壺と甕の破片がある。壺は頸部から肩部にかけての破片で、頸部には2段に施文された横描文が繞り、肩部にかけては赤色塗彩されている。横描文は9本1単位であり、上位を先に施文し、その後、上位に施文されたものに若干重ねて下位の施文を行なっている。T字文が施されていたものであろう。甕は横描波状文と簾状文が施された碗片である。壺・甕とも後期後半の箱清水式土器の特徴を備えたものである。



②石器 (第22図30)

弥生時代に属すると思われる石器は、わずか2点の出土があったにすぎない。2点とも小片であるが、石庖丁の破片ではないかと考えられる。図示した30は、刃部と両側縁を大きく欠失しており、形態・孔の有無とともに不明である。灰褐色を呈する粘板岩製で、調整は丁寧である。図示し得なかつたものは、研磨面剥落破片であるが、有孔磨製石鎌等他器種の石器かもしれない。

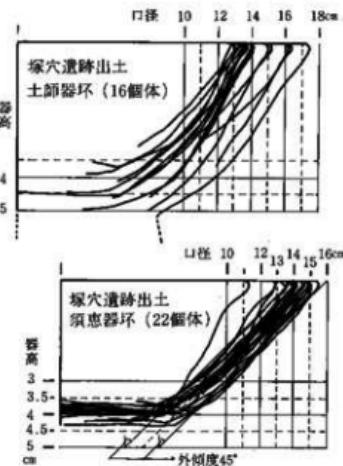
(3) 歴史時代の遺物

①土師器 (第25図~第27図28)

第1・2・3号住居址 (SB-1・2・3) から多く出土しているほかに、遺跡全域の包含層からも相当量の出土があった。特に第2・3号住居址からの出土が多い。器種としては、壺・皿・甕・鉢があり、中でも壺の占める割合が高い。その特徴から9・10世紀を中心とした時期を考えることができる。

壺 (第25図1~14・第26図15~21)

形状が全く異なり、所属する時期もまた異なると思われる第45図10、第46図20・21を除くと、口径測定可能なものは16点あり、第24図でもわかるように、口径13~14cm前後の小型のものが11点で約三分の一を占め、15~17cm前後の大型のものは5点と少ない。形状・法量等は一見統一を欠くかに見えるが、体部の外傾度についてみると、40°~45°の外傾度の強いものと、30°



第24図 塚穴遺跡出土
須恵器環(22個体)

~35°の弱いものとに分類でき、小型のものには外傾度の弱いものが多く、大型のものはその強弱が相半ばする。壺のうち最も多くを占める小型で外傾度の弱いものは、底部から内窵しながら強く立ち上がり、口縁部で稍外反する器形を呈する。15は1点のみ古く、強く内窵する体部に外反する口縁部をもつ。

皿（第26図22~24）

高台付の皿で、第3号住居址（SB-3）よりの出土である。口径約14cm、皿部底部までの高さ1.7~1.9cm、高台までを含めた推定器高は約3cmである。胎土に極小粒子を含み、焼成はあまり良くない。内面は炭素吸着処理・研磨がされ、放射状の暗文が付せられている。回転糸切り・付け高台である。

甕（第26図25~27）

第1号住居址（SB-1）から1点（25）、第2号住居址（SB-2）から3点（26・27）出土しているにすぎない。住居址の土器組成中に占める割合としては著しく低いが、水出造成等により住居址が破壊されているので、その結果であろう。25は、いわゆる長胴甕の口縁部で、体部・底部を欠失している。口径17.5cmをはかり、頸部くびれは弱く、体部から口縁部に向かい緩く「し」の字状に外反する形状を呈する。焼成良好で灰黄褐色~褐色を呈する。26も長胴甕の体下半から底部である。底部は小さく径3.5cmで、外面全面へラ削りで非常に薄く仕上げてあり、器肉は僅か2~3mmである。内面のこげつきが目立つ。27は小甕で、13cmの口径に対し、底径が大きく7.6cmをはかり、低い器高も相まって安定した形状を呈する。大きく外反する口縁部からあまり大きく張らない体部と稍張り出す底部に至る。底部に木葉底を残す。

鉢（第27図28）

口径約23cmをはかる大型の器形で、体下半部及び底部を欠くので全体の形状は不明である。胎土が稍異質で、あるいは所属時期がもっと下がる可能性もあるが、一応土器鉢とした。

②須恵器（27図29~第29図1・2）

住居址を中心に多くの須恵器が出土している。器種には、壺・甕・壺があり、個体数としては壺が断然多い。壺を除き10~11世紀に位置されるべきものである。壺は、古墳時代まで遡る可能性があり、近接する塚穴古墳との関係で把えられるものかもしれない。

壺（第27図29~41、第28図42~52）

図示できたものは22個体あり、口径11~16cm、器高3.7~4.3cmと種々あるが、47図の通り、口径14~15cm、器高4cm前後に殆んどが入り、体部の外傾度も約45°に統一されている。ロクロ水挽き成形による日常雑器といえばそれまでだが、該期大量生産による規格性が見事に現われているといえよう。

甕（第29図1）

第2号住居址（SB-2）出土の大甕がある。体下半部以下を欠失しているが、口径約34cmをはかり、内窓度の強い体部と、強く「く」の字状にくびれる頸部・嘴状に尖った口縁部をもつ。焼

成良好で、全体に黒灰色を呈す。体部外面には叩き目痕がみられる。

壺（第29図2）

強く張って球形を呈する体部と、強くくびれる頸部をもつ。口唇部は丸く、口縁部以下頸部に至る間に3つの稜をもつ。外面に叩き目が残り、内面は青海波文の叩きが行なわれている。当地方ではあまり見慣れない形状を呈し、場合によっては壺とした方が妥当かもしれない。

③灰釉陶器（第29図3～6）

碗・壺・鉢がある。いずれも11世紀頃の東濃地方における生産にかかるものであろう。

碗（第29図）

口径18.3cmをはかり、口縁部で強く外反している。外面淡褐色を呈し、緑色がかった灰釉が口縁部に厚くかけられている。

壺（第29図）

頸部から肩部にかけての破片である。自然釉に近い褐灰色～緑褐色の施釉が部分的にみられる。

鉢（第29図）

特異な形状を呈し、一応鉢とした。口径約10cm、底径約5cm、器高2.8cmをはかる。体下半部が膨れ、体上半部で一端緩くくびれ、外反する口縁部に至る。緑灰色の施彩が行なわれている。

④土師質土器（第30図1～5）

いわゆるカワラケの類と銅釜の類及び内耳土器がある。

カワラケ（第30図）

ごく一般的な形状のものが1点ある。小型で器高が低く、稍肥厚した器肉をもつものである。

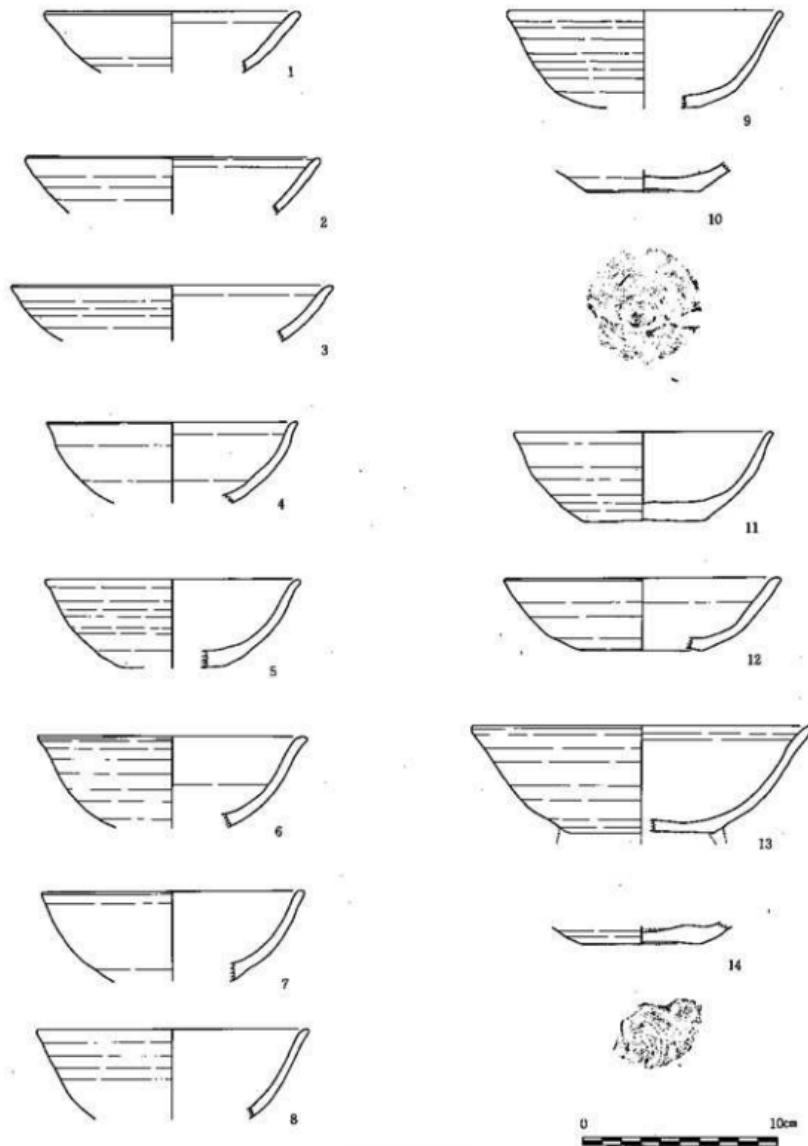
銅釜（第30図）

1点（4）は口縁部直下に1周しない部分的な鋲を3～4ヶ所もつものである。鋲は鈍い突出で低く、貼付されたものであり、器体を1周する高い鋲を有するものよりは後出するものであろう。器形は平縁から直線的にすぼまりながら底部に向かうもので、鋲を有さないが土釜の一種種であることに違いなく、ここに分類した。砂粒を多く含むザラザラした胎土である。両者とも褐色～黒褐色を呈す。第4号住居址（SB-4）からの出土である。

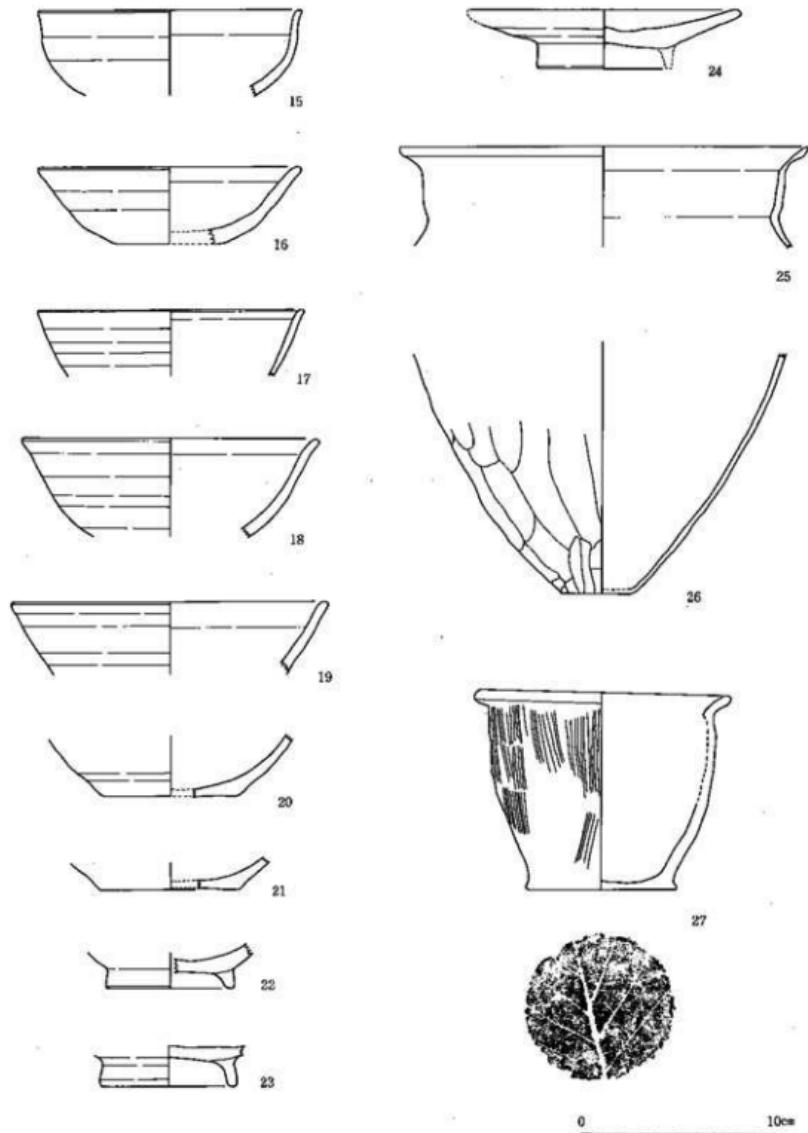
内耳土器（第30図5）

平縁であり、内面の口縁部直下に1対の吊り子（内耳）をもつ一般的形態の内耳土器で、体下半部から底部を欠いている。砂質の強い胎土で、内面灰褐色～黒褐色を呈す。

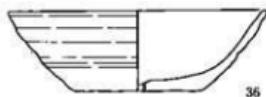
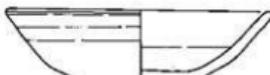
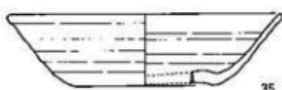
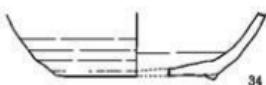
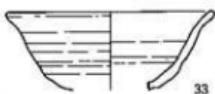
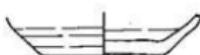
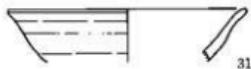
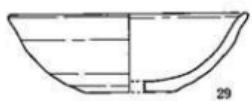
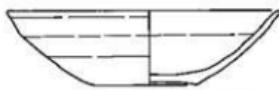
（塩入秀敏）



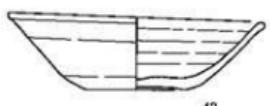
第25図 土師器



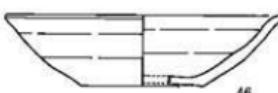
第26図 土師器



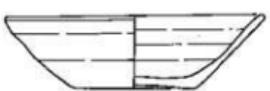
第27図 須恵器



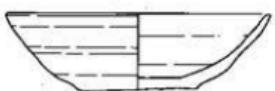
42



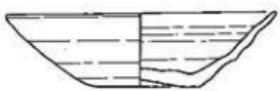
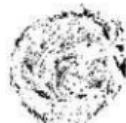
46



43



44



45



47



48



49



50



51



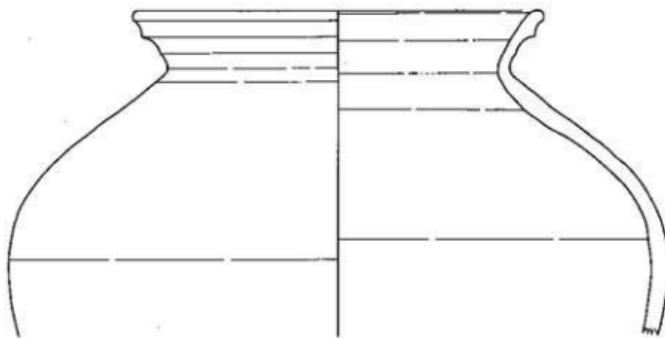
52



第28図 須恵器



1



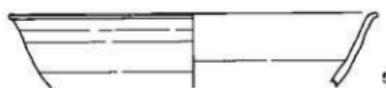
2



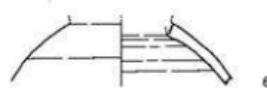
3



4



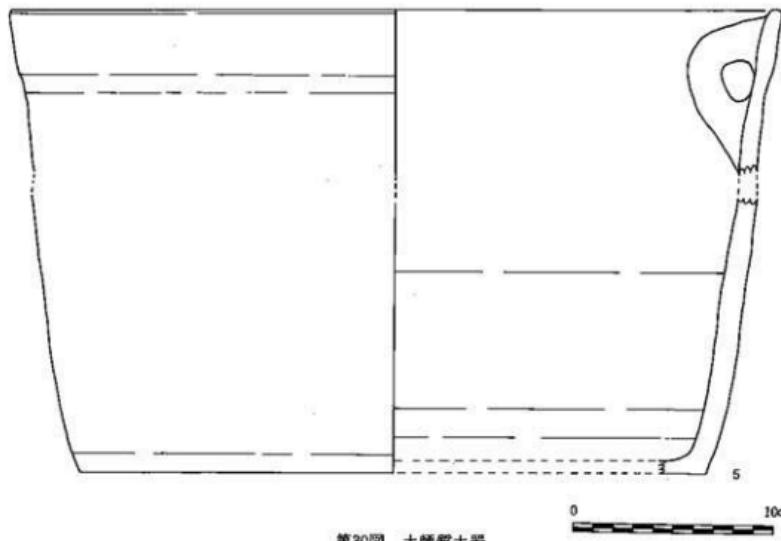
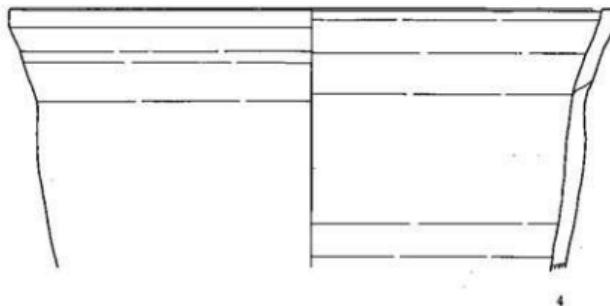
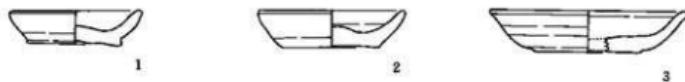
5



6



第29図 須恵器、灰釉陶器



第30図 土師質土器

⑤石器（第22図31・32・第1表）

砥石と石鉢がそれぞれ2点ずつ出土している。

31・32は2点共凝灰岩製の仕上げ砥石である。31は全ての面を使用している。第1号住居址床面からの出土である。32は一部を欠くが、正面・両側面の三面を使用している。

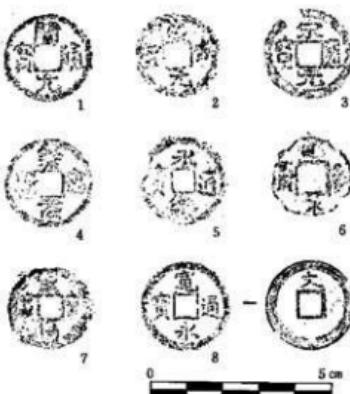
33は、第2号集石土壤の集石の一部として検出された。人頭大の礫を用い、上面から鉢部を作り出している。底面にも浅い凹みが見られるが、これはおそらくすえる際に安定するようになされた加工と思われる。34は、内・外面とも丁寧に仕上げており、内面には著しい使用痕がある。

⑥古銭（第31図・第2表）

本遺跡では、10枚の古銭が出土している。そのうち2枚は欠銭で文字判読が不可能だったので、この2枚を除く8枚について若干記してみたい。

1～5は中国からの渡米銭で、平安時代末から江戸時代初期（1670年）まで、少量の皇朝銭などと共に一般に流通していたものである。このうち、4の熙寧元宝は第1号住居址床面直上より、また5の永楽通宝は第11号土壙最下底より出土しており、それぞれ各遺構との関連性がうかがえる。

6～8は寛永通宝は、江戸時代における全国通用の貨幣で、明治初年まで鋳造・発行されたものである。8は、1と共に第4号土壙覆土から出土しているが、本遺構との関連性は不明である。（堀田雄二）



第31図 古銭

第2表 墓穴遺跡出土の古銭一覧表

図 No.	古銭名	年号 (時代)	西 解	出土地点	備 考
1	(開)元通宝	武徳四年 (唐)	621	S K-04	
2	(開)元(通)(宝)	" (")	"	N 12W 3	
3	宋通元宝			Z	輪の一部欠損
4	熙寧元宝	熙寧元年 (北宋)	1068	S B-01	
5	永樂通宝	永樂年間 (明)	1403～ 1424	S K-11	輪の一部欠損
6	(寛)永(通)宝	寛永十三年～ 明治初年 (江戸)	1636～ 1868	N 3 W 3	輪の一部(4ヶ所)欠損
7	(寛)(永)(通)宝	" (")	"	N 18W 3	
8	寛永通宝	寛文年間 (")	1661～ 1673	S K-04	右の拓影は背
-	不 明	-		N 24 E 3	%残存
-	-	-		S D-01	%残存

第3節 考察とまとめ

東部町には数多くの遺跡が存在するが、特に滋野地区は祢津地区と並んで重要な遺跡の密集地として、古くから知られている。国指定史跡である戊立遺跡を筆頭として、稻荷遺跡・新屋遺跡・桜井戸遺跡・天神遺跡・塚穴遺跡・大星合古墳群など、いずれも当地方の歴史の解明上欠くことのできない遺跡ばかりである。しかし、これらの遺跡は発掘調査がほとんど実施されておらず、また調査されている遺跡でも、発掘区は遺跡内の小範囲に止まり、遺跡の全体像の把握には至ってはいない。

こうした意味からも、今回の塚穴遺跡の発掘調査は重要であり、その成果に大きな期待がかけられていた。しかし、種々の事情により、このたびの水田圃場整備事業により破壊される本遺跡西半の約4割しか発掘調査し得なかったことは、非常に残念である。とはいえ、750m²におよぶ発掘区域内より、平安時代から中世にかけての各種遺構・縄文時代早期から江戸時代にかけての多種多様な遺物が検出されたことは、大きな成果であった。

検出された遺構には、住居址4軒・集石土壙2基・土壙13基・溝状址1基・ピット23基があるが、時期不明のいくつかを除くと、いずれも平安時代後半から中世に属するものと考えられる。このうちの4軒の住居址は、全て平安時代後半に属し、いずれも東壁側にカマド（もしくはその痕跡）を有している。また、造存状態はあまり良好とは言えないが、おそらく切り合い関係はないものと思われる。これらの点および伴出遺物の点からも、この4軒はほぼ同時期の住居址群と考えられ、該期この地に集落が営まれていたことが推察される。集落の規模・性格については、この4軒の住居址からだけでは何も言及し得ないが、塚穴古墳を中心とする発掘区東側の畠地に広がっていたものと思われ、今後の調査に期待したい。

また、縄文時代の遺物は多量に出土したにもかかわらず、該期の遺構は全く検出されなかつたが、これにはいくつかの理由が考えられる。断定はし得ないが、第Ⅱ層以下の堆積状態から、おそらく遺跡内別地点もしくは近隣遺跡からの流れ込みと考えられる。なお、第2号住居址等で認められた縄文時代の遺物の搬入は、特殊な事例として注目される。

遺物の中では、縄文時代早期の押型文土器と晩期の水式土器の出土が特記される。地形的に、水式土器の出土は十分考えられるが、千曲川河岸段丘上から押型文土器が出土すること自体稀有である。同様な地形上の天神遺跡からも出土しており、該期遺跡について再検討が必要である。

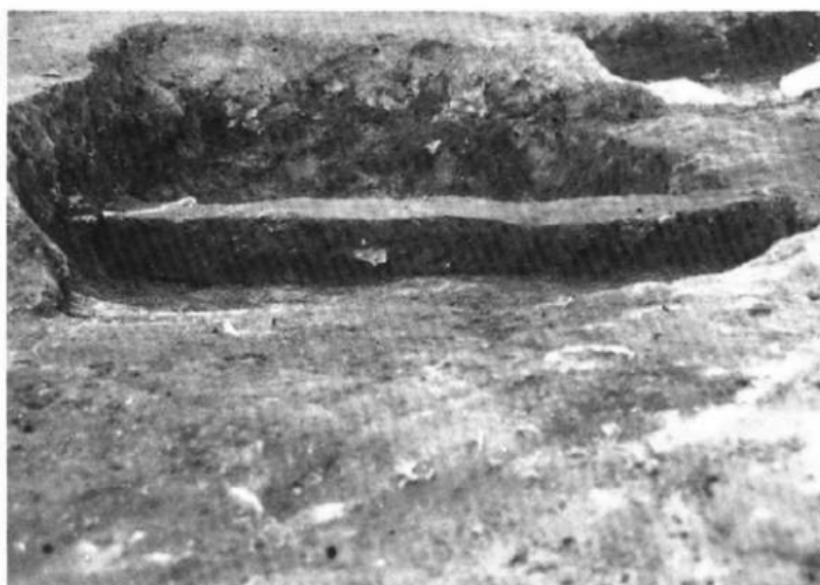
以上、今回の調査の成果について若干記してきたが、調査中あるいは整理作業中数多くの方々の御協力・御指導があり、成果はその賜物である。御芳名は例言中に記したが、改めて感謝の意を表したい。また、筆者浅学非才のため、十分な検討・分析をなし得なかった、大方の御教示を願うものである。



SB-01(東より)



SB-01(南より)



SB-01 内 土塙(SK-02)セクション



SB-02



SB-02 カマド周辺



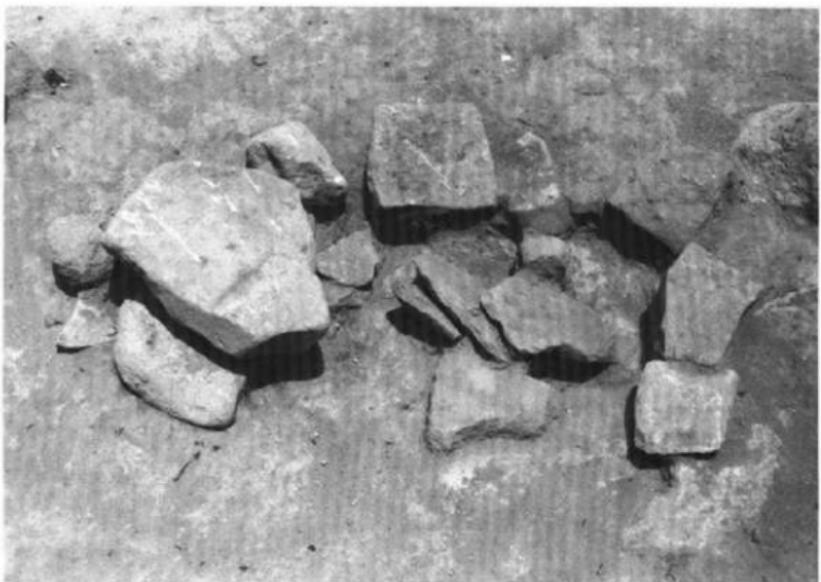
SB-03 土器出土状況



SB - 04



SXb - 01



SXb - 02



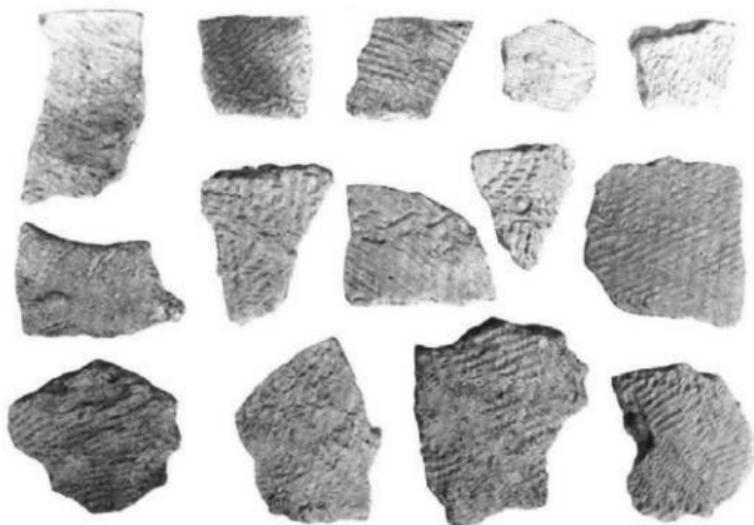
SK - 04



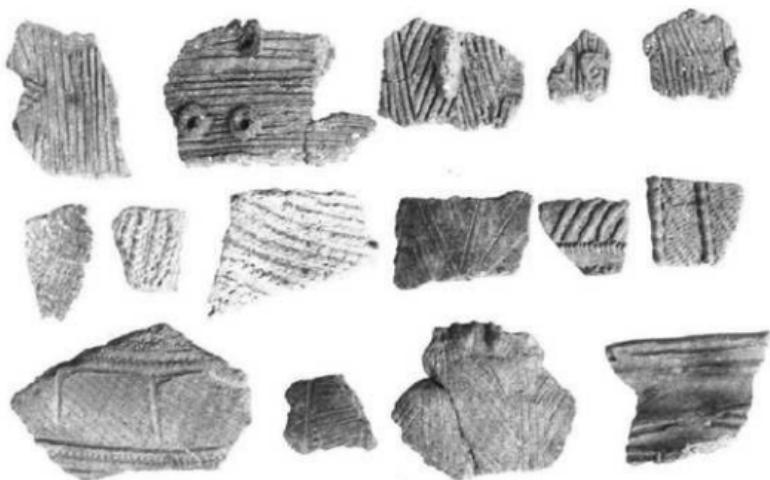
SK - 09



SB - 03 出土土器



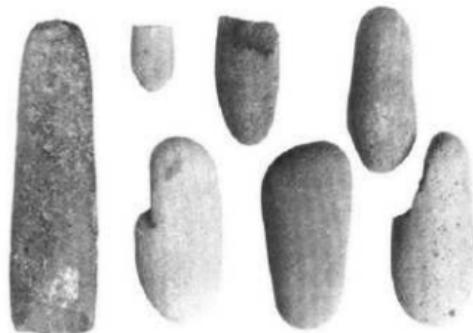
繩文式土器 (1)



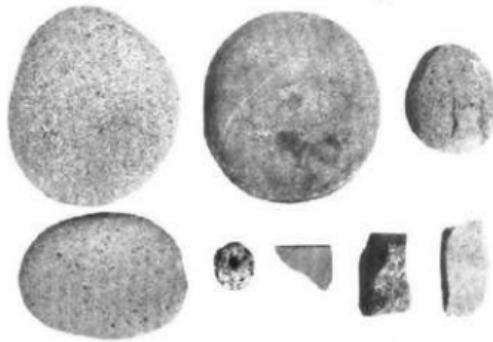
繩文式土器 (2)



石 器 (1)



石 器 (2)



石 器 (3)

鞍掛遺跡

第IV章 鞍掛遺跡の調査

第1節 発掘調査の経過

鞍掛遺跡発掘調査日誌

- 7月11日（月） 器材運搬及びテント設営を行なう。現地踏査・現況写真撮影を行なう。
- 7月12日（火） 調査区域内の草刈り及びくるみの枝払いなどを行なう。
- 7月13日（水） 町教委・調査団・作業員が集まり鍬入れ式を行ない、鞍掛遺跡発掘調査を開始する。調査範囲確認のために試掘グリッド（ $2 \times 2\text{ m}$ ）を10箇所、トレンチを2箇所設定し、掘り上げる。掘り上げ後、写真撮影を行なう。
- 7月15日（金） 試掘の結果により、表土は薄く重機による表土除去作業は中止とする。グリッド（ $3 \times 3\text{ m}$ ）及びベルト（東西1本・南北2本）を設定し、グリッド掘り上げ作業に着手する。
- 7月19日（火） グリッドを拡張する。遺構検出作業に着手する。
- 7月23日（土） 土壌及びピットが検出される。レベル測量後、セクションベルトをとりのぞく。
- 7月26日（火） 土層観察のためにトレンチを設定し、掘り上げる。
- 7月28日（木） 遺構掘り上げ作業に着手する。トレンチの一部を土層観察のために深掘りする。
- 8月3日（水） 遺構セクション実測（土壌・トレンチ）を開始する。
- 8月5日（金） 遺構のセクション及び完掘後の写真撮影を行なう。
- 8月6日（土） 全体平面実測に着手する。
- 8月9日（火） 調査区域全体写真撮影を行なう。トレンチ内土層の土壤サンプルを採取する。
- 8月10日（水） 器材撤収。
- 8月12日（金） ベンチ移動を行なう。図面整理・鞍掛遺跡発掘調査を終了する。

（宮原洋子）

第2節 調査の結果

1 調査の概略

鞍掛遺跡は、乙女平団地の北東方向の菅平有料道路からその北東部に広がって所在する。鞍掛一帯は所沢川押出扇状地の扇尖部に当り、押し出しにより形成された幾筋もの帶状台地と、それに挟まれた凹地とが北東から南西に向かい伸びている。台地上は畠・林野であり、凹地は水田化されている所もある。遺跡は帶状台地上の畠地帯に立地しており、菅平有料道路建設に先立つ昭和43年の分布調査により新たに発見され、同年年末に道路敷部分のみが緊急に調査されている。その結果、遺構は発見されなかったものの、縄文時代・弥生時代及び平安時代の各時代の遺物が出土し、数時代にわたって営まれた遺跡であることが判明した。

今回の調査対象地は上記帶状台地の縁辺緩傾斜地で、凹地との境に近い場所であり、現在はクルミ畠となっている。調査に先立つ試掘調査結果をもとに、北から南へアルファベット順、東から西へ番号順のグリッドを設け、約580m²の調査区域を設定した。基本的層序は、表土が通称「黒ボク」と呼ばれる滲水性の低い黒褐色土層で、以下、ローム粒を含む暗褐色土層・黄褐色のローム漸移層・ソフトローム層が重なり、更にその下に大小の礫が多く含む褐色砂礫層が存在し、これが地山である。礫は上部土層中にも多く含まれ、また地山の砂礫層も凹凸があるため、所々で礫群として現われている。遺物は調査区域の全域から出土しているが、遺構は調査区域北東部に集中して検出された。

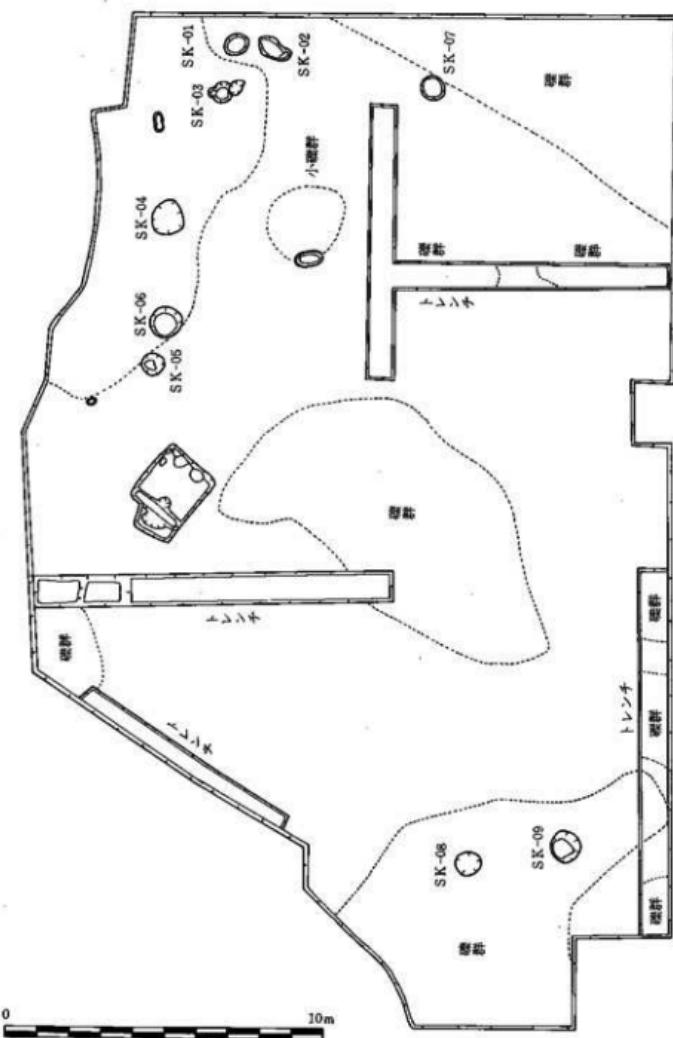
2 遺構

(1) 土壙

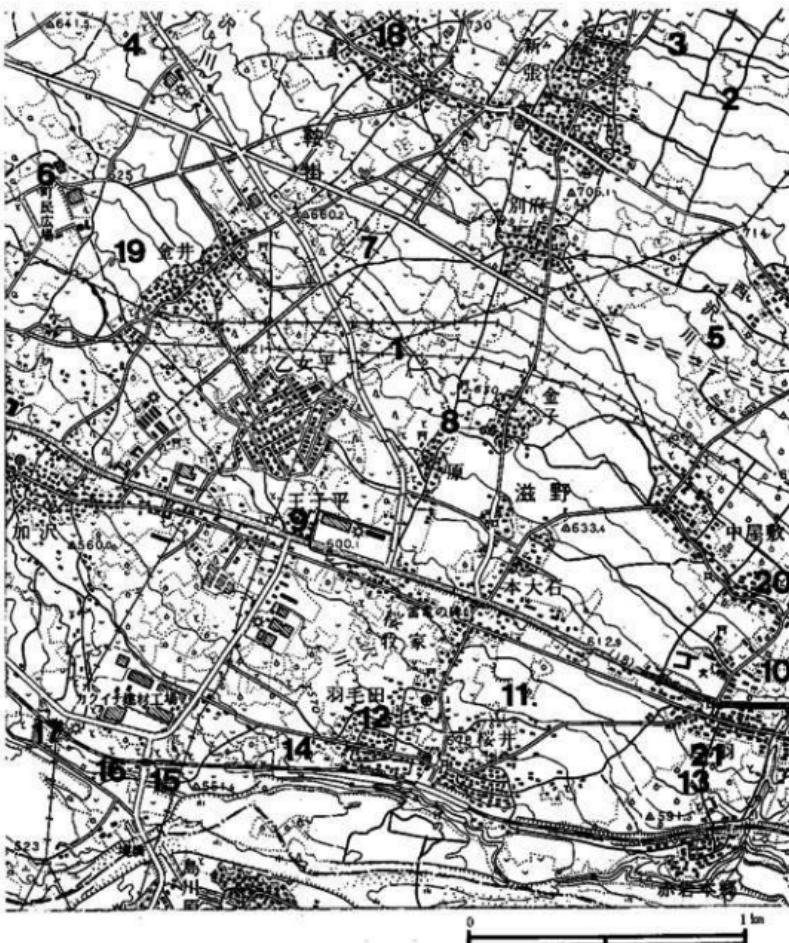
合計6基検出された。全て礫の多い調査区域東北部に集中している。第1・2・3号土壙(SK01・02・03)はC-11グリッドにおいて検出され、円形～長円形の平面形を呈し、第3号土壙のみが偏V字形の断面形を呈する外は鍋底状を呈する。第4号土壙(SK-04)はB-13グリッドで検出され、円形の平面形と浅いV字形の断面形をもつ。本址は礫群中に構築されているが、南側は小形礫、北側は大形礫を取り除いている。北側の大形礫は意図的に配置したかのように見える。大形礫の下部はローム層になり、南側半分は礫層を、北側半分はローム層を掘り込んでいる。径約100cm、深さ約28cmをはかる。第5号土壙(SK-05)はC-13、D-13グリッドに検出された南北方位の長円形土壙で、南北約85cm、東西約58cmをはかる。西側に段を有する偏2段構造をなす。深さは段中央部で約12cm、最深部で28cmである。第6号土壙はB-14グリッドで検出され、径65～70cmの平面円形を呈し、深さ約34cmの偏V字形の断面形を呈する。遺物を出土した土壙は多いが、少量かつ小破片であり、遺構の性格を決定するに足るものではなかった。

(2) ピット

若干のピットが検出されている。しかし、礫抜き取り痕の可能性もあり、性格は不明である。



第32図 鞍掛遺跡調査区域・遺構配置図



1. 鞍掛遺跡 2. 不動坂遺跡 3. 古尼後遺跡 4. 真行寺遺跡群 5. 下原遺跡
 6. 下河原遺跡 7. 下平遺跡群 8. 原遺跡 9. 王子平遺跡 10. 桜井遺跡
 11. 天神遺跡 12. 羽田遺跡 13. 塚穴遺跡 14. 桜井戸遺跡 15. 源祭遺跡
 16. 赤岩遺跡 17. 南平遺跡 18. 上の原古墳 19. カンカン石占墳 20. 庄司館古墳
 21. 塚穴古墳

第33図 遺跡の位置と周辺の遺跡

3、出土した遺物

(1) 縄文時代の遺物

① 縄文式土器 (第35図1~20)

本遺跡において出土した縄文式土器は、概ね図示したもので全てである。出土数も少なく、また遺構に結びつくものも少ないので、一括説明を加えることとする。

第59図1から8までは沈線文の施された土器である。1は口縁部破片である。ゆるやかな波状口縁を呈するらしい。口縁部直下に2条の平行沈線文が施され、それと口唇部間に半截竹管施文具による平行条線が交錯した状態となる。胎土には石英粒、黒雲母がやや多く含まれている。成形、焼成ともによく堅緻な土器である。次に、2・3・4は比較的細い沈線文が施されている。2は口縁部片である。波状口縁を呈し、波状に沿って5条の沈線帯をもち、その下位にやや間隔をもって同じく5条の沈線帯が施される。その間にわずかながら無節縄文が充填されている。さらに沈線帯は横位に5条が1単位で施されるらしい。胎土には石粒を多量に含み、やや粗い感じをうける。3も2と同様に、はっきりしないが數条の沈線が1単位をなして、やや斜めに施されている。胎土は2に似る。4は6本の沈線が1単位となり施されている。その他の部分には、施文はしっかりしていないが、わずかに無節縄文が施されている。5~8は幅広で深く施された沈線が主体となる。5は横位に施された2本の平行沈線文と、その下部に左右に斜行する数条の沈線が施されている。胎土には、石英粒、黒雲母を多量に含んでいる。成形、焼成等は良好な赤褐色を呈する土器である。その他の3点も胎土、色調、施文手法等が5に酷似する。

9~12は無節縄文の施されている土器である。9は幅広の沈線文が施され、その下部に縄文が施される。縄文はやや乱雑で、ほぼ横位に施される部分と、斜行する部分とがある。胎土には、石英粒、小石粒をやや含み淡赤褐色を呈している。10は施文がやや浅くはっきりしない部分が多いものの、胎土、成形等9に酷似する。11は2条の垂下する沈線間に縄文が充填されており、その他の部分は丹念に磨かれている。胎土、成形ともに良好であり、外面赤褐色、内面黒色を呈する。

13~17は縄文が主文様となる土器である。13は施文が浅く、また胎土も粗いためほとんど文様が不明である。14・15・16は半節L R縄文が全面に施されている。いずれも胎土には黒雲母、石英粒を含み、淡赤褐色を呈する。焼成不良で脆弱である。17は3条の沈線とその間を結ぶ様に斜めの沈線がみられ、その下位に縄文がわずかながら認められる。18~20は器厚が12mm程度でやや厚い。いずれも器面に幅広の沈線が施され、その他の部分は無文となる。胎土には小石粒、石英粒、雲母等が多量に含まれ、かなり粗い。3点とも胎土、色調ともに酷似する。21は底部に網代痕を有する土器である。本例1点のみの出土であった。胎土には雲母、小石粒が多く含まれ粗い。

以上縄文式土器について個々に説明を加えたが、小破片が多くその全容を知ることは困難であるものの、前期最終末から中期後半期にかけての断片的な出土状況と言えよう。 (西沢 浩)

② 石器（第36・37図、第3表）

鞍掛遺跡より出土した石器は、全て縄文時代に属するものと思われるが、总数は80点と比較的の少量である。そのうちの11点を図示したが、ここではその11点についてのみ記してみたい。

3点の石鎌が出土した。1は、やや大形の無茎石鎌で、先端部を欠く。両側縁はほぼ直線で、二等辺三角形に近い形態を呈している。抉いはやや深めで、弧状をなす。縄文時代中期に属するものと思われる。2は、鎌身の長い無茎石鎌である。先端部を1cm程欠くが、1とほぼ同じような形態を呈していたものと思われる。1との相違点は、鎌身が長い事の他に、脚部が内湾している点と、加工が丁寧である点、また1に比べ、よりシンメトリックである点などがあげられる。以上の特徴からこの石鎌は、中期とも考えられるが、前期に含まれる可能性が強い。3は、欠損部が多く全容を知り得ないが、おそらく両側縁が弧状を呈する無茎石鎌と思われる。抉いはかなり深かったものと思われ、弧状をなして鎌身の1/3程まで達している。中期に属するものであろう。

4の石核状石器とは、千鹿頭社の報告（P92、93 実測図参照）において初めて注目された石器である。平坦な打面から連続して小剥離を行なっているが、そこから得られる剥片は最大でも2cmで、多くは1cm内外である。平面形は方形に近く、全体に薄い板状をなすものが多い。この種の石器は、縄文時代全般に亘って相当数存在するものと思われるが、連続した小剥離が何を意識したものなのか全く不明である。本遺跡では一点のみ出土したが、これはやや小形であるものの、この石器の特徴を全て具備した典型例である。

50点におよぶ剥片類のうち、加工痕を有するものが2点出土している。5は、小形石刃状剥片の一部に粗い加工を施したもので、その周辺には使用痕が看取される。6は、刃部のごく一部しか遺存しておらず、縁辺に見られる加工が何を意識して施されたか不明である。あるいは、石鎌の未製品かもしれない。なお、本例は第1号土壙より出土した。

7は、打製石斧の破片もしくは打製石斧製作過程に生じた剥片である。長さに対し幅が約3倍あることと、縦断面の様子などから、打製石斧の製作過程に生じた剥片である可能性が高い。

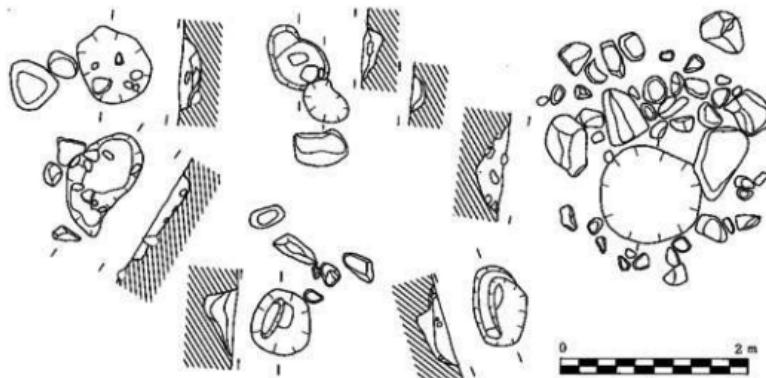
8は、短冊形を呈する打製石斧である。斧頭部を欠くが、加工のあり方等から、欠損部はごく僅かで、全長11cm前後であったと思われる。正面に、自然面を大きく残している。刃部は斜刃となっているが、刃部作出はあまり顕著ではない。むしろ、着柄部と思われる両側縁の調整の方が丁寧で、その中央付近には「ツブレ」や「スレ」が見られる。

9の横刃型石器は、大人のにぎり拳大の円礫から得た剥片を素材として、その形状をあまり変えずに石器に仕上げている。ただ、打面及び打瘤部は、表裏各々から数回におよび調整を施して、双方を完全に除去している。

10は、磨石の破片である。中央部その他に磨耗痕が看取される。凹石である可能性もある。

11の軽石製品は、比重の小さな軽石を用いている。表裏に磨耗痕がかなり顕著に認められ、何かを擦るのに使用されたものと思われる。あるいは、軽石製浮子の未製品（穿孔がなされていない段階）なのかもしれない。

（堀田雄二）



第34図 土壌実測図

(2) 弥生時代の遺物

① 土器

撫尙状施文具による波状文が施された甕の破片と、内外面に赤色塗彩された高環環部破片、外面塗彩の甕破片と思われるものが出土しており、出土数は僅少である。甕破片の構造波状文は表面が荒れていて不明瞭な部分が多いが、雑な施文が多い。後期後半箱清水式期のものである。

(3) 歴史時代の遺物

① 土師器

器形を窺い知ることのできるものは皆無であり、明らかに土師器破片と断定できるものも多くない。しかし、胎土の様子等から甕の体部破片と思われるものがいくつか含まれている。

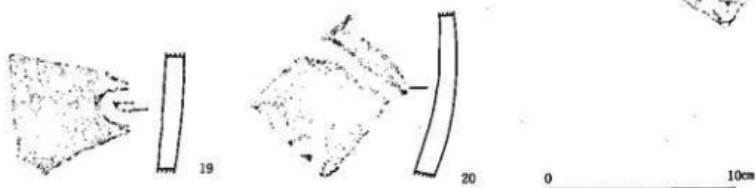
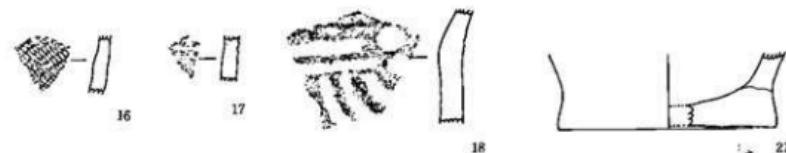
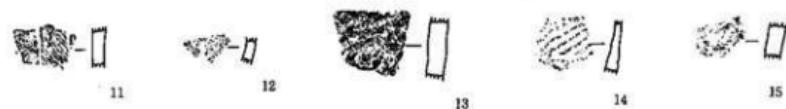
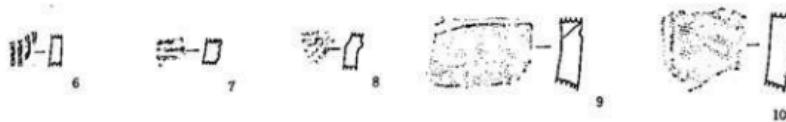
② 土師質土器

内耳土器の破片と思われるもの、及び用途不明土製容器破片と摺鉢破片がある。摺鉢破片は、厚さ1.7cmの半纏を呈し、内面には幅約2mmの13条が底部に向かって垂下している。この13条の沈線は内面全面に施されているものではなく、かなりの間隔があいており、その間隙を幅約0.7mmの浅い沈線で埋めている。しかし、これは全ての間隙に施されているものではない。よく使い込まれており、内面の磨耗は著しい。

③ 陶磁器

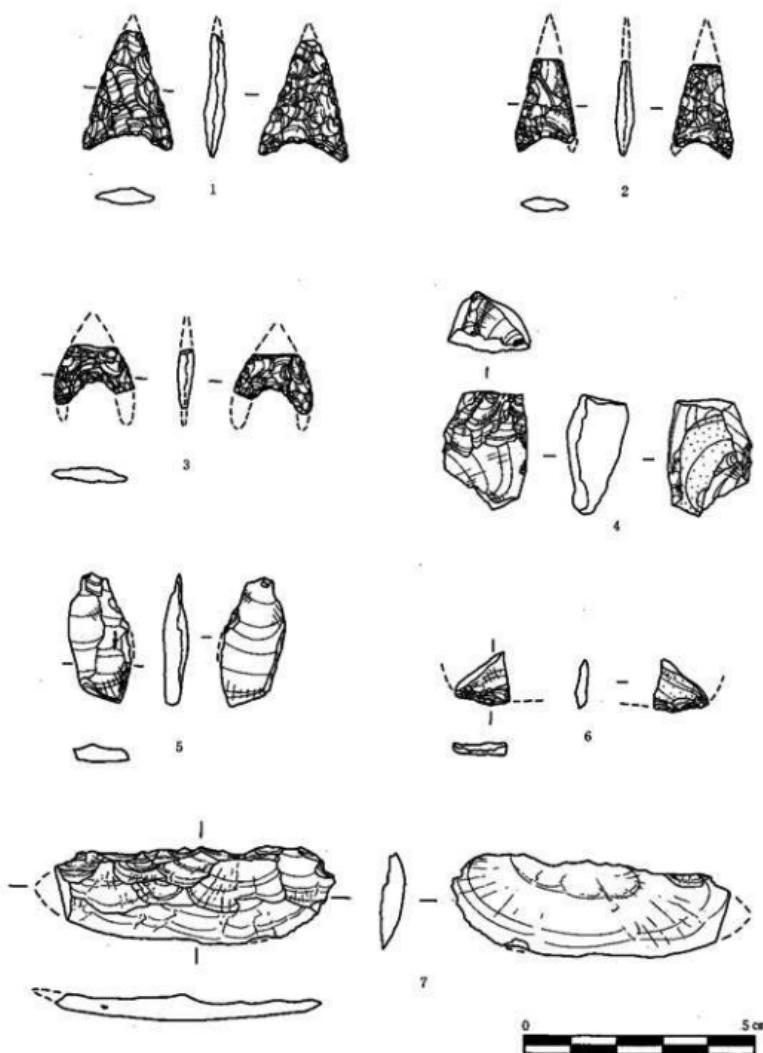
多くの陶器・磁器の破片が出土しており、種類も多岐にわたり、所属する時代も長い。しかしいずれも小破片で全器形を知り得るものはない。陶器では、15~16世紀と考えられる美濃・瀬戸系陶器が多く、黄緑色の釉薬を厚くかけたもの、鉄釉のもの、柿釉のもの等がある。また、松代焼の甕の破片や益子焼と思われるヌカ釉の並ないし鉢の破片も含まれる。磁器としては、近世磁器が最も多く、染付(青花)が圧倒的に多い。中には近世まで下降しそうなものも何点か存在する。

(塩入秀敏)

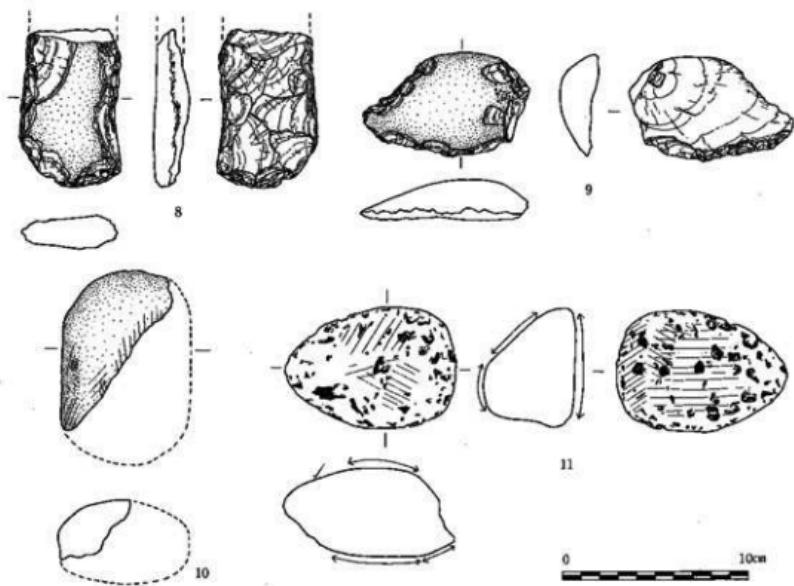


0 10cm

第35図 繩文式土器



第36図 石器実測図(1)



第37図 石器実測図(2)

第3表 鞍掛遺跡出土石器観察表

単位はcmおよびg
〔 〕内数値は現存値

No.	器種	出土地点	石材	長さ	幅	厚さ	重量	残存状態	備考
1	石鉋	G-17	黒曜石	(2.60)	1.95	0.45	1.5	先端欠損	
2	"	E-16		(2.00)	(1.30)	0.40	0.8	先端・片脚欠損	
3	"	Z	黒曜石	(1.30)	(1.75)	0.35	0.6	"	
4	石核状石器	E-14	"	2.60	1.85	1.35	5.7	完	裏面の一部に節理面
5	剥片	B-15	"	2.85	(1.35)	0.55	1.7	片側縁欠損	加工痕・使用痕あり
6	"	SK-01	"	(1.20)	(1.20)	(0.30)	0.4	刃部のみ	加工痕あり 裏面の一部に節理面
7	打製石斧片	F-16		2.20	(6.10)	0.60	8.0	片側縁欠損	
8	打製石斧	C-17		(8.40)	5.40	1.90	118.0	斧頭部欠損	正面の一部に自然面
9	横刃型石器	試掘ヒット		5.60	8.80	2.20	113.0	完	"
10	磨石	Z		(8.60)	(5.80)	(3.80)	149.0	刃残存	
11	軽石製品	"	軽石	6.50	9.10	5.20	81.0	完	正面・裏面に磨耗痕あり

第3節 考察とまとめ

今回の鞍掛遺跡の緊急発掘調査によって得られた結果は、決して豊富なものであるとは言い難い。遺構にしても性格不明の土壙6基と数基のピットを検出したにすぎないし、出土した遺物も縄文中期の土器・石器から、中・近世の陶磁器に至るまで、長年月かつ多様にわたってはいるものの、その内容は貧弱で乏しいものばかりである。これは、調査対象地として選定された地点が、帯状台地と沢状凹地との境に近い傾斜地であり、恐らく台地上に営まれたであろう遺跡の縁辺部にしか当っていないことを原因している。しかし、今回の該地域の圃場整備事業の対象地には台地上が含まれていらず、調査対象地が遺跡縁辺部と予想される地点に限定されてしまうのも、如何ともしがたいことであった。上記のような事情により、始めから制約のあった調査ではあったが、それでもいくつかの知見を得ることはできた。以下にそれらを挙げ、若干の考察を加えて考察としたい。

先ず土層についてであるが、通称「黒ボク」と呼ばれる軽く潜水性の低い表土の下は甚だ複雑であり、前述の如き基本的層序とすることはできても、狭い調査区域の中でも相当な変化がみられ、プライマリーな堆積後にかなりの擾乱を受けていて、寛保の戊の溝水の大影響等を考えざるを得ない。

遺構については余り多くを言うことができない。少量のしかも小破片の土器を出土した土壙が存在する程度で、性格を把握し得るものがないからである。しかし、遺跡の縁辺部に集中し、敢て礫群に掘り込んで構築している点から、是非この場所を選定せざるを得ない理由があり、この辺に土壙群の性格解明の鍵がありそうである。

また、出土遺物についても遺構と同様である。縄文時代中期の土器・石器から弥生式時代土器・平安時代土器、中・近世の陶磁器など長年月にわたる多種多様な遺物であるにもかかわらず、まとまった資料はなく、断定的に言うことのできる材料がないのである。けれども、遺跡の中心部が存在すると考えられる台地上は、縄文時代中期以降何回もの廃絶を繰り返しながら集落が営まれたであろうことが想像される。しかも、弥生式土器の出土は、その時代には既に沢状凹地を利用した小規模開田が行われていたのではないかとの考えも可能である。東部町における水田化は、特に扇状地においてはかなり遅れたと考えられているだけに、このような少量遺物でも、それを繰り返して新たな事実を導き出す可能性も存在しよう。

ともあれ、鞍掛遺跡の発掘調査で得られた結果は豊かなものとは言えないながら、弥生式土器の出土から、該時代の開発について新事実を導き出すことになる可能性につながるものであり、遺跡縁辺部の調査であることを考えると、あながち乏しい結果であったとばかりは言えないものである。

(塩入秀敏)



発掘調査前の鞍掛遺跡



調査後の道跡(東北部分)



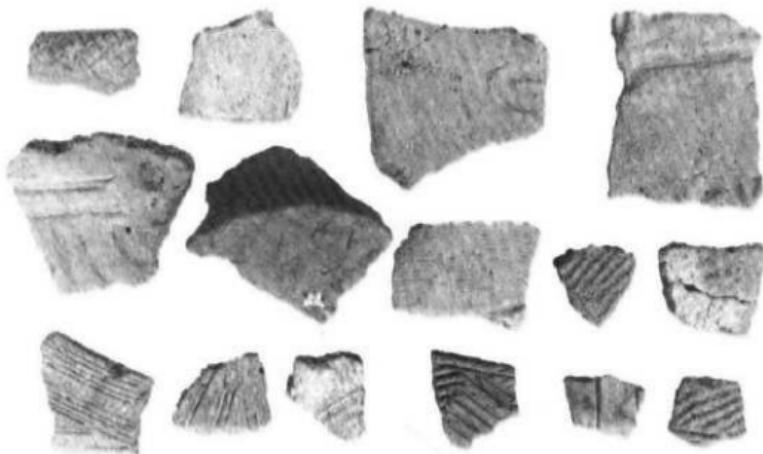
土 塚 (SK-01-02-08)



トレンチ 内の様子



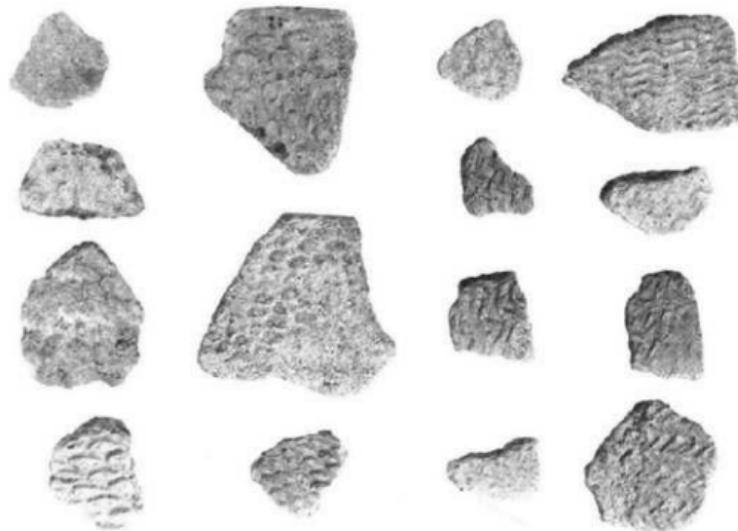
トレンチ内の様子と土層



縄文式土器



石 器



中尾遺跡出土神型文土器（參考資料）

天神遺跡

第V章 天神遺跡の調査

第1節 発掘調査の経過

天神遺跡・発掘調査日誌

- 8月10日（水） 器材運搬、テント設営、現地踏査を行なう。
- 8月19日（金） 調査区域内の作物の伐根作業及びくるみの枝払いを行なう。発掘調査の範囲を検討する。
- 8月20日（土） 鍬入れ式を行ない、天神遺跡発掘調査を開始する。グリッド(3×3m)の設定を行ない、掘り上げ作業に着手する。ベルトを設定する。
- 8月26日（金） グリッドを拡張する。遺構検出作業に着手する。
- 9月3日（土） グリッドのうち3箇所を土層観察のために深掘りを行なう。ベルトを取り除く。
- 9月6日（火） 遺構（土壤・溝状遺構）の掘り上げに着手する。
- 9月10日（土） 遺構のセクション実測及び写真撮影を行なう。
- 9月14日（水） 調査区域全体実測に着手する。
- 9月19日（月） 全体写真撮影を行なう。
- 9月21日（水） 器材撤収を行なう。
- 9月26日（月） ベンチ移動及び遺跡遠景写真撮影を行ない、実測図などを検討し、天神遺跡発掘調査を終了する。

（宮原洋子）

第2節 調査の結果

1 調査の概略

天神遺跡は大石沢川押出扇状地の扇端部近くで、所沢川押出扇状地との縫合線である西沢川にもまた近くに位置する。遺跡周辺は南面する緩傾斜地であり、斜面を流れる小流が新たな開析を行って、台地と凹地が連続する地形を形成している。凹地は水田化され、台地はクルミやアスパラなどが栽培される畑地となっている。また、付近には三反田遺跡・三田遺跡が存在し、同様の性格の遺跡であると考えられることから、この2遺跡をも含めて天神遺跡と総称することもある。

調査地点選定に際して作物との関係で制約を受け、最も濃密に遺物の散布がみられる場所を選ぶことができず、南側に隣接した地点が対象地とされた。磁北線を基準に3m×3mのグリッドを東西にA～Iの9列、南北に12～27の16列を設定したが、畑の形状やクルミの木との関係で実際には約600m²が調査の対象となった。

第1層である表土は軽くボクボクしており、第2層は茶褐色を呈しやはり繊りの弱い軟かい土質で、黄褐色の第3層も軟質でローム漸移層と認められる。第1層を除くと礫は殆んど混入しない。遺物は第1層及び第2層から出土し、遺構は第2層あるいは第3層までを掘り込んで構築されている。

検出された遺構は少なく、溝址1（SD-01）と土壙2（SK-01・02）があるのみである。また出土物も絶対量は多くなく、しかも小破片ばかりであるが、溝址覆土中からの出土が稍多かったほかは調査区域全域にわたって満遍なく出土している。

2 遺構

(1) 第1号溝址（SD-01）

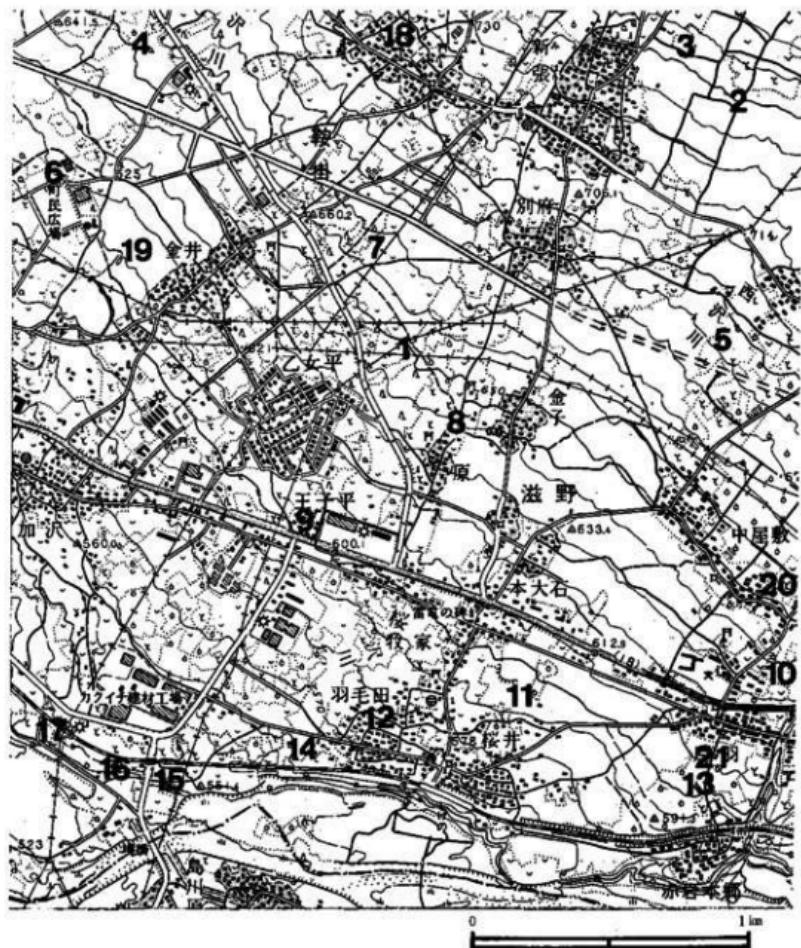
調査区域北端のI-12・13グリッドにおいて検出され、北西一南東の方位をもつ。幅約150cm、深さ60～70cmの断面V字形の溝であり、黒褐色土層の第1層を除くと何層もの砂礫層や花泥層によって埋まっていた点から、かなりの長期間にわたって水が流れていた水路であることが判明した。砂礫層中から弦生式土器、黒曜石片が出土している。

(2) 第1号土壙

I-12・13グリッドで第1号溝址と重複し合う形で検出されたが、全容を知ることはできない。出土物の関係からは第1号溝址との新旧関係を知ることはできないものの、切り合いの状況から、恐らく溝址によって切られたものと考えられる。

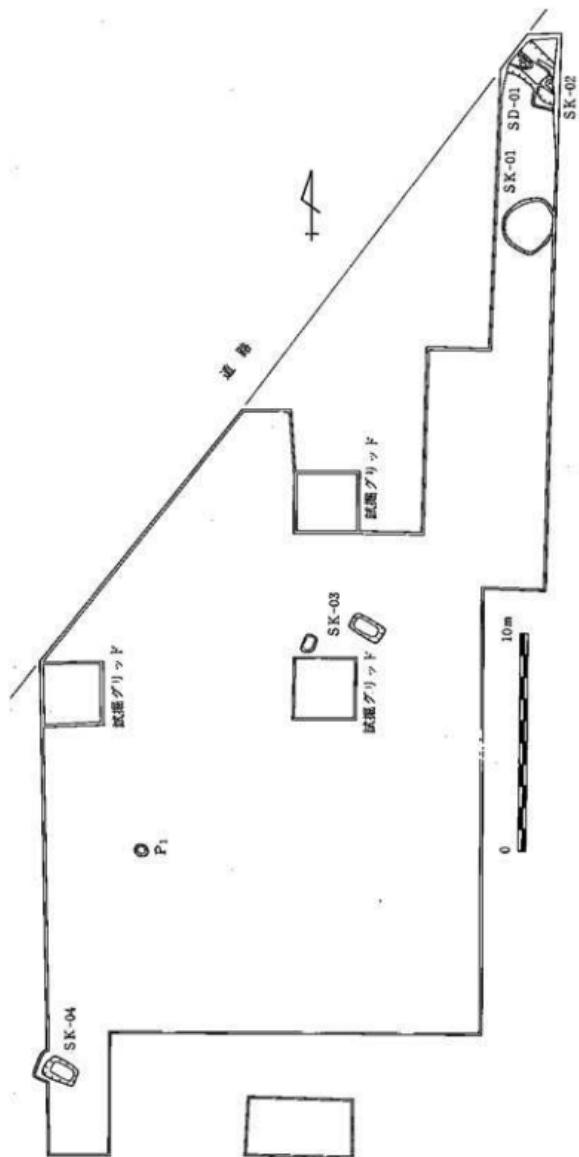
(3) 第2号土壙

I-14・15グリッドにおいて検出された径約270cmをはかる略円形の平面形と鍋底状の断面形を呈する。中心部で深さ約18cmの浅いもので、遺物の出土は皆無であった。



- 1. 破折道跡 2. 不動坂遺跡 3. 古屋敷遺跡 4. 真行寺遺跡 5. 下原遺跡
- 6. 下河原遺跡 7. 下平遺跡群 8. 原遺跡 9. 上子平遺跡 10. 福尚遺跡
- 11. 天神遺跡 12. 羽毛田遺跡 13. 塚穴遺跡 14. 桜井戸遺跡 15. 萩田遺跡
- 16. 赤岩遺跡 17. 南平遺跡 18. 上の原遺跡 19. カンカン石占墳 20. 庄司館古墳
- 21. 塚穴古墳

第38図 遺跡の位置と周辺の道路



第39図 天神丸跡調査区域・遺構配置図

出土した遺物

(1) 縄文時代の遺物

① 縄文式土器 (第40図1~25)

本遺跡において出土した縄文式土器は、概ね図示したものすべてである。出土数は少ないものの、時期的には広範に及んでいる。

1~4は楕円押型文が全面に施されている。押型文土器はこの4点のみの出土である。いずれも小破片のため全容は知れないが、赤褐色を呈し成形、焼成ともに良好である。5~14までは縄文を主文様としたものである。5は器面が荒れ、成形も非常に悪い。器面の一部に比較的太い縄文が2列平行に配されている。胎土に少量の雲母を含み赤褐色を呈する。6はやや太い縄文が平行に配されている。成形悪く、器面は粗い。胎土に雲母を少量含み、暗褐色を呈す。7は胎土に纖維を含んでいる。縄文施文はやや雑で、成形、焼成も悪い。8は羽状縄文を構成し、器面中心部は2種の縄文が重なり合って演された状態となっている。成形、焼成ともに良い。9・10はともに器面が荒れ、施文がはっきりしないが、無節縄文が施されている。胎土に石英粒、金雲母、黒雲母を多量に含んでいる。15は地文に半截竹管による集合条線が施され、その上に円文の貼り付けがなされている。16は口縁部片であるが、口唇部から垂下する2条の紐状のはりつけ文がなされている。焼成は大変よく堅緻である。17~25は沈線文を主体としたものである。17は突起の1部とみられ、ほぼ全面に沈線が並列して施されており、内側には平行な2本の沈線が巡っているらしい。18は平行な2本の沈線間に縦下する刻み目状の沈線が施されている。施文はやや複雑である。19は斜状の沈線が間隔を保ちながら施文され、その斜状沈線を区画する様に横位の沈線が巡る。20は沈線が横位に数条施されている。沈線は幅広のものと、幅の狭いものとがあり、比較的強く深く施文されている。胎土には小石粒が多く粗い。21は口縁部片である。器厚は14mmを計り、胎土には雲母や石英粒を多量に含む。施文は2条の平行沈線間に横長の刺突文が巡る。その下部に沈線によって区画された中に斜状沈線文が施文されている。22はその文様構成は不明瞭ながら斜状あるいは横位に沈線が施されているらしい。23は曲線状沈線内に縄文が充填されている。外面の成形はていねいであるが、内面は粗雑である。24は口縁部片であり、口唇部には間隔を保つて刻み目が施されている。施文は円形の沈線を中心とし、左右対称に沈線が広がりをみせている。焼成は非常によく堅緻である。25は沈線が曲線的に施されているらしいが、その文様構成は不明である。黒褐色を呈し、成形、焼成ともに良好である。

以上縄文式土器について個々に説明を加えたが、いずれも小破片であり詳細な内容については不明な点が多い。しかしながら、良好な押型文土器やわずかながらも纖維を含んだ土器も含まれ、縄文時代早期から中期まで、断続的ながらも時期の広がりをみせる出土状況かと思われる。

(西沢 浩)

② 石器（第41図・第4表）

天神遺跡では、縄文時代に属すると思われる石器が 1 点出土している。そのほとんどが剥片類であり、図示し得たのは 9 点のみである。

1 は、やや大形の無茎石錐である。抉りは浅く、側縁はゆるやかな弧を描く。縄文時代前期によく見られる形態である。2 は、側縁が鋸歯状をなす有茎石錐である。この鋸歯状の側縁は意識的に作り出されており、縄文時代後期あるいは晩期に属するものと思われる。

石錐は 3 点出土した。いずれも明確なつまみ部を有していないが、これらは一端に錐部を作出した結果としてつまみ部的な箇所が生じたと理解した方がよいかもしれない。3 は、薄い剥片を素材としており、錐部断面は凸レンズ状を呈している。4 は、三角錐状の素材を用い、それぞれの角を除去するような調整をほどこしている。その結果、錐部の断面はほぼ円形を呈している。5 も、4 と同様の調整を行なっているが、調整があまり入念に行なわれておらず、しっかりとした錐部を作出していない。あるいは未製品なのかもしれない。

前記したとおり、本遺跡では剥片類が最も多く出土している。これらの多くは、6 のような石器製作過程に生ずる各種調整剥片であるが、中には石器の素材剥片や、8 のような加工痕、使用痕を有する剥片などが含まれている。こうした剥片を生みだす敲石が 1 点出土している（？）。細長い礫の一部に著しい敲打痕が看取されるが、かなりの使用がうかがえる。また、正面中央部にも敲打痕が残されており、特殊な使用方法が想像される。

9 の軽石製品は、比重の大きな軽石を用いたもので、4 cm 前後の溝が不連続に巡っている。類例は管見に触れず、使用方法等は全く不明である。あるいは、一種のおもりであろうか。

（塙田雄二）

（2）弥生時代の遺物

① 土器（第42図）

壺（第42図）

頸部から肩部にかけての施文部及びその直下の破片である。施文部には構造 T 字文が施され、14 本 1 単位が認められる。施文部以外の外面は赤色塗彩され、内面は刷毛調整、ヘラ磨きがなされており、赤色塗彩はされていない。後期後半箱清水式期のものである。

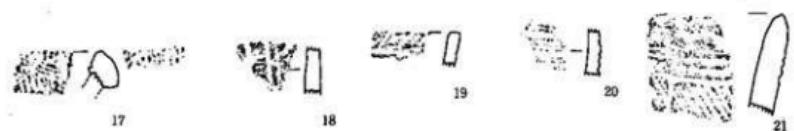
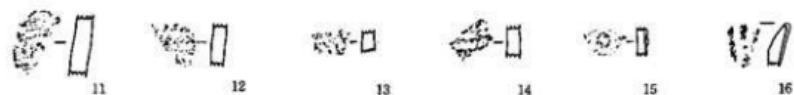
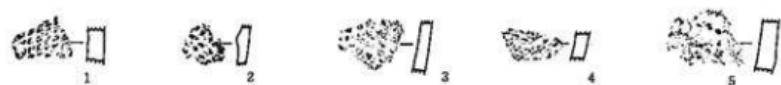
甕（第42図）

口径部と体部の破片である。いずれも構造状施文具による波状文が施文され、簾状文をもつもの（？）もある。波状文は細密なものから粗大なものまであり、施文具構造も 8 本から 12 本までが認められ、簾状文は 9 本 1 単位で施文されている。内面はヘラ磨きがなされ、1 点のみ板状工具の木口による調整がされている。色調は赤褐色～黒褐色を呈する。その有する特徴から後期後半箱清水式期に所属するものである。

（塙田秀敏）

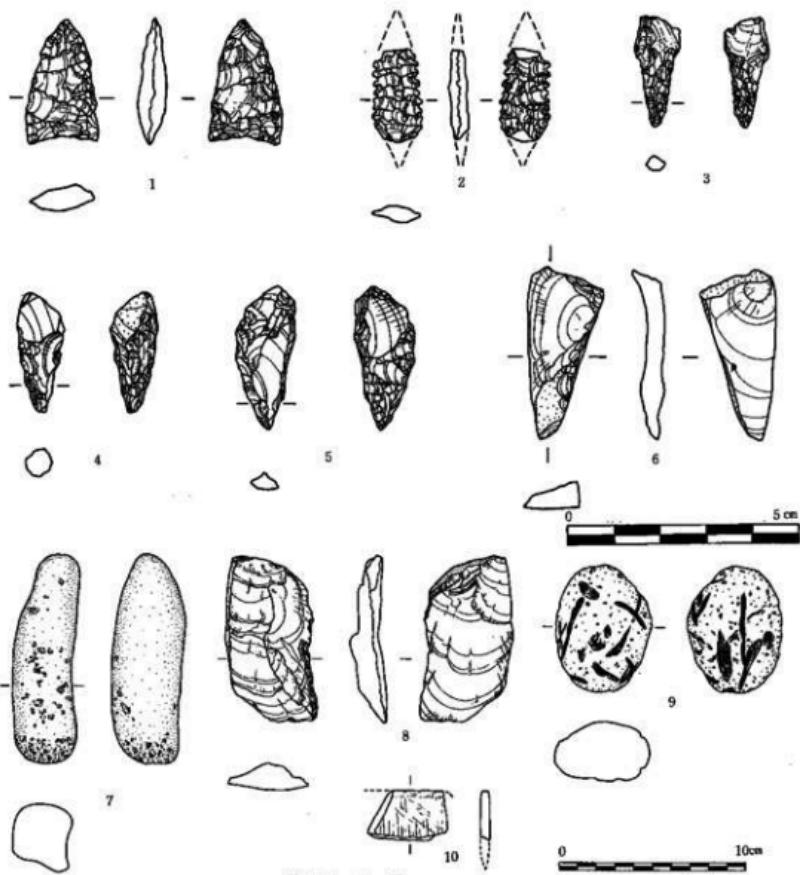
② 石器（第41図10・第4表）

弥生時代に属すると思われる石器が 3 点出土している。いずれも石泡丁の小片で、そのうちの



0 10cm

第40図 縄文式土器



第41図 石器

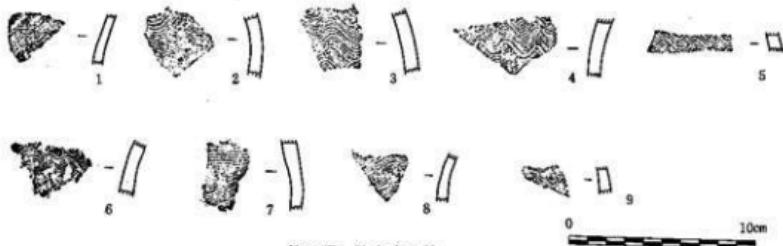
第4表 天神遺跡出土石器観察表

単位はcmおよびg
()内数値は現存値

No.	器種	出土地点	石材	長さ	幅	厚さ	重量	現存状態	備考
1	石頭	Z	黒曜石	2.75	1.60	0.60	2.0	完	
2	"	"	" (2.05)	1.10	0.45	0.9		先端・茎欠損	
3	石錐	C-23	チート	2.40	1.00	0.35	0.7	完	
4	"	"	黒曜石	2.60	1.05	1.05	2.2	"	表面の一部に節理面
5	"	Z	"	3.20	1.30	0.90	3.0	"	未製品か
6	剣片	SD-61	"	3.80	1.95	0.90	3.8	"	正面の一部・打面に自然面
7	鉋石	B-26		11.20	3.60	4.00	224.0	"	
8	鉋片	Z		8.80	4.90	2.00	73.0	"	加工痕あり
9	鉈石製品	B-20	燧石	6.80	5.10	3.40	67.0	"	
10	石庵丁	I-19	粘板岩	(2.70) (4.30)	0.50	8.1		万能・両側縁欠損	孔の有無不明

1点を図示した。本例は、刃部と両側縁を大きく欠き、穿孔の有無さえも知り得ない。厚さは約5mmを測り、C-20区・C-21区より出土した厚さ2.5mmの他の2点とは明らかに別個体である。

(堀田雄二)



第42図 弥生式土器

(3) 歴史時代の遺物

① 土師器

壺・甕の破片が多数あるものの、全器形を知り得るものも、また図上復元できるものもない。破片から知ることのできることは、先ず壺では、内面に炭素吸着処理を施した黒色研磨の内墨土器とそうでないもの、底部が回転糸切りのものが存在し、高台の付せられたものはない。また、甕では、いわゆる長胴甕の体部破片と思われるヘラ削りされた破片がある。底部破片から底径のさして大きくなっていることが窺える。10~11世紀に所属するものであろう。

② 須恵器

これも土師器同様、壺と甕が存在するが図示できるものはない。壺は青灰色を呈し、微砂粒を含む胎土のもので、ロクロ水挽き成形によって作られている。甕破片は少ない。しかし、口縁部に2~3条の鈍い稜をもつ破片が1点含まれており、これは壺口縁部の可能性もある。壺の特徴から10~11世紀が考えられる。

③ 土師質土器

カワラケ・内耳土器の破片があり、中でも内耳土器体部破片が多い。カワラケは大型のものの破片で砂粒を多く含み、焼成は良好である。内耳土器は吊手部分の出土はないが明らかに内耳土器と認められるものであり、平縁に砂粒を多く含んで外面に煤が付着した体部破片と、底部破片が存在する。

④ 陶磁器

中世後半~近世にわたる種々多様な陶磁器片が相当数出土している。陶器は鉄種のかかった天目茶碗・黄瀬戸等瀬戸系・美濃系のものが多いようである。磁器は白磁の類と染付(青花)が多く、青磁の類は僅かしかない。染付には吳須の色がじんでポンヤリしたソバ猪口風の碗形のもの等がある。

(塩入秀敏)

第3節 考察とまとめ

天神遺跡の発掘調査は、調査区域設定の当初から調査団にとっては意図と違って残念なものであった。即ち、表面採集の結果遺物の散布が濃密であった地点が、計画段階と異なり、圃場整備事業の対象外となって、遺跡中心地と目される地点に南接する場所を調査区域に選ばざるを得なかつたことである。しかも、遺物濃密な地点からは東部町でも出土例の少ない押型文土器が採集されていることから、その気持は猶更であった。しかし、調査も破壊の一種であるとすれば、調査をしなければそのまま保護につながるので、寧ろ喜ぶべきことかもしれない。

さて、調査の結果であるが、遺跡中心部に隣接するとはいへ縁辺部であることにちがいなく、溝址1と土塘2を検出し得たにとどまり、遺物も調査区域全域から出土しているものの、小破片の出土があっただけで、期待の押型文土器はついに出土しなかつた。けれども成果がなかつたわけではない。数少ない遺構と小破片ばかりの遺物のうち注目したいのは、溝址と弥生時代の遺物である。

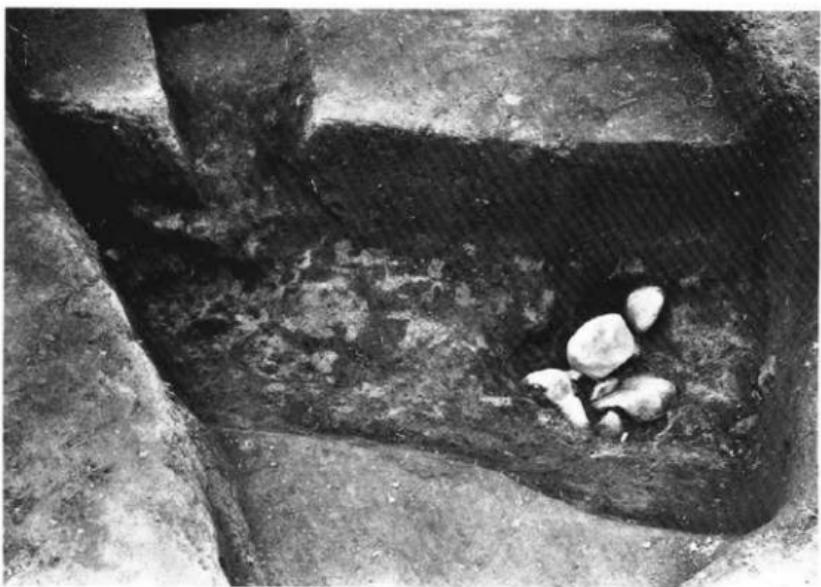
調査区域北端で検出された第1号溝址（SD-01）は実際に水の流れた水路であること、出土遺物から弥生時代後期後半の箱清水式期に比定されるものであることが判明しているが、詳細にみると、台地は北東から南西に伸びており、北西—南東の方位をもつ溝址は、等高線に沿つて台地を横断する可能性が高い。即ち、台地を東西両側から挟んでいる凹地と凹地を結ぶ水路であると考えられ、何点もの石庖丁片の出土から、水田耕作の存在が想定され、本遺構もそのための灌漑用水路と考えるのが妥当であろう。また、溝址より南側にはこれといった遺構の存在がみられないで、集落の南限を画する意味をも有していたのかもしれない。

調査の結果、その内容は必ずしも豊富なものではなく、期待を抱かせた押型文土器は1点も出土しなかつたが、その存在は表面採集で度々確認されており、本遺跡が縄文時代早期からの遺跡であることは確実で、東部町で最も早い時期に集落が営まれた遺跡の一つである。そして、後背湿地の少ない東部町における小流を最大限利用しての弥生時代水田化の一例ともなる重要な遺跡であることは最低限言えるものである。

（塩入秀敏）



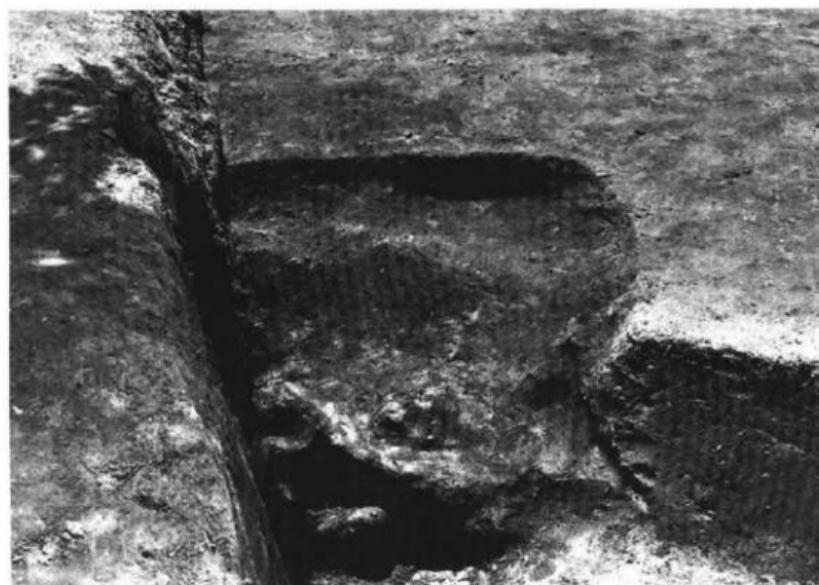
天神遺跡遠景



溝 1 (SD-01)



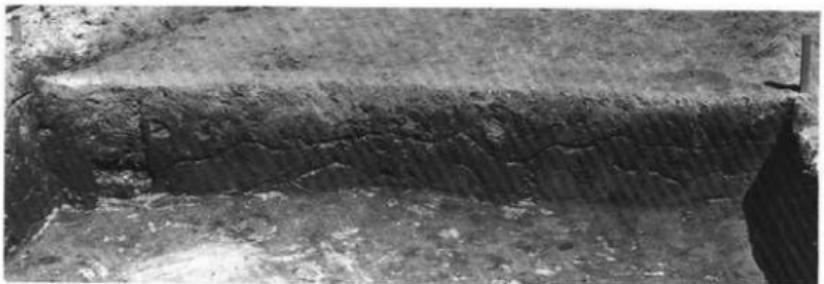
溝 I (SD-01) セクション



土 坡 I (SK-01)



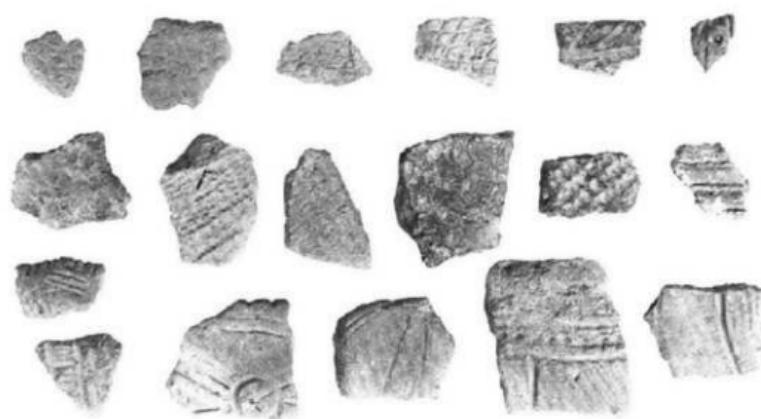
土 坑 2 (SK-02)



土 層



土 層



圖文式土器



石 器

あとがき

東部町における昭和58年度の埋蔵文化財発掘調査は、塹穴遺跡・舞台遺跡・鞍掛遺跡・天神遺跡・成立遺跡の5遺跡について行われた。これらは全て記録保存を前提とした緊急発掘調査である。このうち、成立遺跡は2年度にわたる範囲確認調査の初年度であり、報告は完成年度に行うことになっているので、ここでは塹穴遺跡以下の3遺跡について調査結果の報告をするものである。

調査の結果は、遺跡毎に独自の性格を有しているが、縄文時代草創期から近世に至るまで、非常に長年月及び多岐にわたるものであり、東部町の歴史を解明してゆくには欠かすことの出来ない資料を提供することになった。特に塹穴遺跡の縄文時代前期土器は、東部町としてはまとまつた好資料である。

いずれにしても、まだ肌寒さを感じる頃から炎暑の夏、そして秋風の吹く季節まで、労をいとわず連日地味な作業にご苦労頂いた作業員の皆さんには本当に感謝申し上げる。このような人々の努力の中から埋蔵文化財保護の気運も芽生えてくるものであろう。また、土地所有者の方々、東信土地改良事務所、役場産業課をはじめ多くの関係者から好意的なご協力を賜った。文末ではあるが、報告書の上梓に当たり記して深甚なる感謝の意を表したい。

(塩入秀敏)

塹穴・鞍掛・天神遺跡

—緊急発掘調査報告書—

昭和59年3月20日印刷

昭和59年3月30日発行

編集 東部町遺跡発掘調査団

発行 東部町教育委員会

印刷 鬼灯書籍株式会社



